

THE FIRM FOUNDATION  
OF THE CHRISTIAN FAITH

基督教信仰之根據

特

020458-000-5

特18-518

基督教信仰の根據 一名, 基督教証拠要略

ビート/著

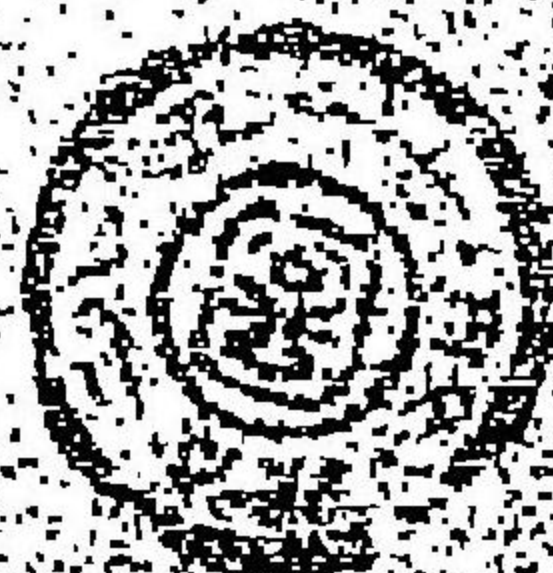
M28

ABI-0268





此書を録せるは爾曹をして  
 イエスの神の子キリストな  
 る事を信ぜしめ之を信じ其  
 名に因て生命を得させんが  
 爲なり(聖ヨハネ)



### 翻譯者の序

此小冊子の目的は、原著者が英書（英語）の序文中（序文）に述べらるゝ如く、基督教の真理の基づく所の證據をば、明瞭簡單に、然も學理上精密に、且概括的に論述し、以て世上に行はるゝ所の、不信仰を防禦し得べき、堅固なる城砦を與へんとするにあり。

今之を日本にて翻譯し、出版する所以は、該書は能く此目的を達し得るのみならず、最早判然基督教には反對せざれども、未だ其最高の真理をば、充分確信する能はざる人々（日本に於て其數増加しつゝあり）に、真理の研究の興味と補助とを與ふるに足らんと信ずれば也。

此書の論ずる所及び其論法は、同じ著者の物したる「福音の大原理」と、幾分か同様なり。讀者若し此小冊子の導によりて、福音の犬原理（大原理）或は此種の書籍を研究し終には、是等のもの源なる基督教の聖書を熟讀せらるゝに至らば、神の祝福により、原著者及び翻譯者等の希望の達せらる

ことなきにしもあらざるべし。

千八百九十五年五月

東京 西オランダ、ニヤ、イ、ン、ヂヤ

### 基督教信仰の根拠序文

余は英國にありて、日本國より來遊せらるゝ人々に遇ふこと少なからざりき。その來らるゝや、歐羅巴に於て、自國よりも幾層高尙なる文明を見んとてなり。余は此人々と談話する毎に、その智識の余等と異ならざるを認む。然らば何故に亞細亞洲の諸國民を越へて、はるく此國に來らるゝや。

此書は此疑問に對し、唯一の答辯を與ふべし。蓋東洋諸國と異なりて、西洋諸國が悉く有する所の唯一の要素は基督教なればなり。

此答辯にして過たずば、希望の大門戸を、日本國に開くものなり。日本人は恰も吾儕の祖先なる獨逸人の如く、基督教國より高尙なる文明の物質的及び智識的利益を取りつゝあり。吾儕の希望する所は、前者も後者の如く、是等の利益を取ると共に、一層高尙なる、キリストの福音より出づる幸福を得られんこと也。若し然かせらるゝならば、その鋭敏なる

智能は必らず大希望を喚起し、日本國は將來亞細亞洲諸國の嚮導者となり、以てかの殆んど凡ての歐羅巴人が自らの有する、あらゆる卓越せる事物の創造者と認むる所の、大亞細亞人(キリスト)を尊崇めしめん。日本に於て、既にこの大亞細亞人(キリスト)の信徒となりし人々は、獨一の父、獨一の主、獨一の靈より、最も豊かなる祝福を得られんこと、天涯萬里の英國に於ける、卑しき此一信徒の祈るところなり。

紀元千八百九十四年六月十二日

ロンドン府リッチモンドに於て

原著者

基督教信仰の根據目錄

第一章	宗教と神學……………	一
第二章	「目に見ゆるもの」と「目に見えざるもの」……………	一〇
第三章	人間の良心……………	一九
第四章	死後の賞罰……………	二七
第五章	基督教とキリスト……………	三三
第六章	基督教の文書……………	四〇
第七章	キリストの道德的敎訓……………	四七
第八章	キリストの福音……………	五五
第九章	神の子……………	六九
第十章	キリストの甦……………	七八
第十一章	反對論……………	九一
第十二章	結論……………	一〇七

基督教信仰の根據目錄終



Table of contents listing various chapters and their corresponding page numbers, including entries for 'The Authority of the Bible' and other theological topics.

基督教信仰の根據

一名基督教證據要略



Text block containing the title '基督教信仰の根據' and author information: '英國神學博士... 米國神學士... 本和泉彌六郎... 合譯'.

Main body of text on the left page, starting with '此書は宗教と神學とに就て論ぜんとするものなるが故に最初宗教'.

世間では日用に用ひられ何人にも能く知られたる普通の言辭より取  
 除たがらぬ(聖書の中には宗教といふ言辭の用ひらるゝこと至て少  
 く)而して其意味を種々様々なり(宗教信者といへば即ち目を以て見る  
 可成なる事物を就て考へ而して其思想によりて善を行すの原動力と  
 補助とを得る所の人々をいひ無宗教家といへば即ち現世の事物にの  
 み心掛る人々を謂ふなり。  
 右に説明したる如く宗教とは行爲をいふに非ずして心の状態をいふ  
 ものなり行爲を指して宗教的行爲といふことあるは其行爲に因らず  
 其行爲を生ぜしむる所の心に浮べる思想に基づけるものなりされど  
 心中にある宗教的氣質といふものは何時にても尊敬正直善行等とな  
 りて外部に顯はれんとするものにて人間の内心と言行をば全く支配  
 し或は支配せんとするものなり。  
 此の如く宗教は目に見えざる事物を追求めて之に依頼むものなるが

故に單に道徳をいふものと同じからず何となれば目に見ゆる此世界  
 と現世のことばかりを考ふる人々にても善を行し得る者あればなり  
 大若し善を行すの原動力を得んが爲めに目に見えざるものを求むる  
 こと始めて始めて宗教的道徳家と稱ふことを得べし又宗教は必ず善  
 を行すことを奨励するものなるが故にかの人間を墮落せしむる空虚迷  
 信と異れるのみならず又少しも人間を高尙にせざる奇異空論とも同  
 じからざるなり。  
 今述ぶたる定義の中には神に就て論ずることなし基督教にありては  
 「目に見えざるもの」に關し悟り浮べたる思想のうちにて取り分け神に  
 關する思想は最も大切なるものにして人間を正義するにも最も力あ  
 るものなれども昔の國々に於てはしからずして活ける神に關する確  
 なる智識もなく信仰もなかりしが目に見えざる世界および死後の生  
 命等に就ては深く覺る所ありて之が爲めに善を行すの強き原動力を

得たる者少ならず。かの古き佛教の經典に記さるゝ釋迦の如きは此  
 一例なり。彼は死後無量の安樂を得んが爲めに、現世の快樂を棄て、善を  
 行すを以て、安樂を得るの途となせり。此の如き人は之を宗教家と稱へ  
 ざる可らず。然れど彼は活ける神に就ては少しも知りし所なかりき。  
 有に述べたる定義によりて考ふれば、目に見えざるものにして悟り  
 深べたる思想は善を行すの獎勵となり、補助となり、以て人間の最も大  
 なる利益を生ぜしむるものゝ存すること疑ふ可らず。これ人間の有ら  
 ゆる經驗によれる明かなる事實なれば、凡て吾儕が見ざるものに関し  
 悟り深べたる觀念は、其真正か誤謬かに應じて、或は吾儕を益するもの  
 ともなり、或は害するものともなりて、其真正ときは人間の行爲を安全  
 に導けども、其誤謬ときには實に危険ものなることは、吾儕の經驗によ  
 りて明かなり。故に宗教にして、其人類を益することの明かなるときは、  
 其宗教の教ふる所の目に見えざる者は、眞に實在する者たること疑ふ

可らず。若し其教ふる所の目に見えざる者が眞實の者にあらざれば、其  
 宗教は一の迷へる信仰たるべく、而して迷へる信仰なるものは永久に  
 人間を益すること能はざるものなり。されば目に見えざるものに関す  
 る吾儕の思想をば、可及的實在物より遠ざからざる様にし、その目に見  
 えざる實在物をば出來得るだけ確實に充分に覺ることは、至極肝要な  
 ることなり。是即ち神學の目的とする所なり。  
 神學とは人間を正義する所の目に見えざる者に就て、我儕の知る所の  
 事實をば悉く集めたる一の學問なり。此の如き智識をば順序を立て、  
 述べたるものは、即ち組織神學にして、其種々なる部分は互に大切なる  
 關係を有ち、以て一全體を形作るものなり。  
 神學は一の學問、即ち人間の智識の一部分と稱ふことを得べし。何と  
 なれば、目に見えざるものに関する吾儕の觀念は、後に至て明かなるが  
 如く、凡て吾儕の直接に觀察せる事實より出て、事實に基づき、事實によ



りて證明せらるるものなればなり。故に自ら見えざるものに關する者  
 神の思想は之に相應て實際存在する所のものと順かんとするものな  
 り而して此の如き實在物は吾儕遠からずして現世を去り萬物を離る  
 るなきに見ることを得べき唯一の實在物なるが故に至極大切なも  
 のなり。神學はかくも大切な實在物を論ずるものなればなり。神學の  
 神學は宗教の學問なり。何となれば自ら見えざるものに關する觀念は  
 して人間を正義するものに就て論ずればなり。凡て宗教を信する者は、  
 皆神學者なり。蓋宗教信者は己を助け善を行はしむるものなる自ら  
 見えざるものに關し悟り得たる思想を有すればなり。此の如き思想は  
 即ち神學なり。若しも宗教信者にして智識に富める者ならば其學識は  
 順序正しむるべし。此順序正しき思想は即ち組織神學なり。これに反  
 して人をも神學者たるも宗教信者たるもなることあり。何となれば

「目に見えざるもの」に關する思想を有る人之能はり。善を行すの原動  
 力を受ふることを隨意に拒むを傳へければなり。然れど斯く其思想が己  
 の性質を支配せんとすむを拒むときは其思想も自然傷けらるゝは殆  
 んど免れざる可なりと云ふことなり。

神學は又此の哲學なり。哲學といふ言辭は原語にては智慧を愛する  
 ことを意味する。その智慧とは人間の智識のうち最も高尚ものを謂ふな  
 る。此の科學が觀察説明辨別せざるの諸の事實に貫徹せしめ、洪大深遠  
 なる原理を發見せんとすむるものは即ち哲學なり。故に哲學は科學の主  
 眼に位し、科學の目當とするところのものなり。此哲學といふ言辭は諸の  
 學問の各種に關しても用ひられ、人間の智識全體に關して通用がある。  
 其最も意味の廣きものをいふば、吾儕が直接に觀察して知る所の一切の  
 事實を集めて之を解釋し、以て吾儕の周圍にある萬物に貫徹せしめ、洪大  
 なる原理を發見し、天地宇宙全體をば概括的に説明し、且つ生命のゆゑ

思議なるものと之に附屬ものとを幾分か説明さんとするものなり神  
 學は最も高尚なる哲學と稱することを得べし何となれば神學の論ぜ  
 るとする諸の事實は人間の知る所のものうち最も肝要なるものに  
 して凡て此他の事實を説明さんには必ず之に依らざるを得ざればな  
 り。此書の目的とする所は人間を正義する所の目に見えざるものに関す  
 る吾儕の知識の根據をば科學的及び哲學的方法によつて徹底的に  
 明さんとするにあり。

第一章 宗教とは何ぞや、その結果如何とすべし

(一) 宗教とは何ぞや、その結果如何とすべし

(二) 宗教と道徳との關係は如何とすべし

(三) 宗教と神に關する思想のなきものあるものと其思想のありしもの  
 結果如何とすべし

(四) 宗教の眞實なるものと虚偽なるものと其結果如何とすべし

(五) 組織神學とは何ぞや、自然主義の神學と如何とすべし

(六) 宗教神學を有せしめて宗教信者たることを得るや、如何とすべし

(七) 神學は科學なるか、哲學なるか

第二章 宗教の眞實なるものと虚偽なるものと其結果如何とすべし

第三章 宗教と神に關する思想のなきものあるものと其思想のありしもの  
 結果如何とすべし

第四章 宗教の眞實なるものと虚偽なるものと其結果如何とすべし



「目に見ゆるもの」と「目に見えざるもの」

凡て吾儕の周圍にあるものは、目に見ゆる世界にして、其中には無機物あり、有機物あり、理性ある者あり、その種類數へ難く、其美はしき事言語に盡す可らず、其人生の必要に適へること驚くに絶えたり。此世界の複雜たること、絶えず變化すること、を考ふれば、天地宇宙は獨り自ら存在するものにあらざりして、何か之より他にある者、或は物より出で來りしこと實に明かなり。吾儕は切に問はん、此美はしき世界は何處より出で來りしや、如何にして今日の様に來りしや、此世界と吾儕人間との關係如何なるや、吾儕は自然界の物、解は、亦、又人間の作れものにあらず、かの智慧、或は如く見ゆる自然なる諸の勢力によりて、支配せらるる。

ものある事、此外に取分けず吾儕の注意を惹くものは人間の作れもの、物体なり。この人間の作れもの、就て考ふるに、其最良ものは、王、宋と、或る意匠に、よれば、出來得べからず。此の如きものは、最初に人間の心中に思想として存在し、その後目に見ゆる物となり、而して其思想は、段々に進歩して遂に、其ものとなること多し。さながら、幾枚と、なす下繪圖を、段々に製し上げて、遂に立派なる畫となり、美はしき、雜物を、作る事、亦が如し。凡て人間の作れもの、其、悉く、王、宋と、幾枚と、なす、其、力、を、得、て、出來止るものなり。而して如何なる場合に於て、其、作、る、本、間、は、意、の、作、れ、し、品、物、なり。其、儼、ら、る、こと、な、す。吾、儕、等、畫、を、見、て、之、を、考、む、は、理、也、其、畫、を、か、き、し、畫、家、を、賞、む、る、は、異、な、ら、ず。さ、ら、な、す、近、世、の、詩、人、は、或、る、は、吾、儕、は、問、は、ん、吾、儕、の、周、圍、に、ある、此、美、は、し、き、世、界、は、誰、が、作、る、以、て、造、ら、れ、智、慧、に、よ、り、て、作、ら、れ、たる、もの、なる、や、は、た、智、慧、を、豈、も、誰、の、勢、力、の、み、に、よ、り、て、出、來、し、もの、なる、や、天、地、宇、宙、が、人、間、の、作、れ、し、最、良、者、

品物よりも優るゝ程に人間よりも優れたる大工作者の手跡は、此世  
 界を顧みざる人々或は此世界は唯其人間の利益を快樂とを興ふるよ  
 り外に少しも深き意味なきものなる中、高尚不思議なる智慧を有する  
 其動物は、高尚不思議なる智慧者の畜なるや、或は禽獸の有するが如  
 き勢力のみより出来りし者なるや、吾儕物質世界を研究するときは、  
 自己は、その非常に優れたる一大存在者を御覧見るとも、或は非  
 常に劣れも物を見下すのみなるや、是等の間に對しては、唯一の優る  
 のみ、人間の力を以て作り得べき凡ての物よりも優り、人間を動かす最  
 も真き思想と工作とを出さしむる所の、此美はしき自然界は、明白に  
 て、誤解をあたざる言辭を以て揚言して曰く、「一大なる智慧は、この物  
 質世界の裏面に存し、其止に在り、畜家の其畜よりも勝るが如く、この  
 の大智慧は自然界よりも遙に勝り、此美はしき大天地が人間の作りし  
 最良の品物よりも優るが如く、この大智慧は人間よりも遙に優

れたる者なり。此大なる建築物は、一大建築家の力量と技能とを證明  
 するものなり。夫れ生物の發生成長は、吾儕の目に見ゆるのみならず、人々の知るところ  
 の、絶えず働ける勢力の作用によりて、幾分か説明し得べきものなる  
 が故に、人或は右に述べたる議論は、この事實によりて駁めらるゝと思  
 ふことあらん。されども決して然ることなし。花の繁殖を以て一例とせ  
 んに、種々様々なる凡ての花が、自然の勢力の作用によりて生ずること  
 すべてを、説明せられたりとして、吾んぞ右に述べたる議論の駁めらるゝ  
 ことあるを、恰も吾儕が或る製造品を見て驚き、その後之を作りし自  
 動機械を知ることも、以前の驚の少しも變らざるが如し。吾儕は、  
 此機械を作りし者は、誰ぞと問ひ、而して其者の技能を賞賛するも、  
 ば吾儕は、同じく世界を作り出し、自然の勢力は何處より來りしや、此  
 勢力を動かせんとして、至極最初に之を衝動し始めて、その作用方法を支



明すこと能はず、高處より石を放せば必らず地に落るも、誰か其重きを  
 いふ勢力が、其第一秒時に十六呎下降る道理をば説明し得る者あらん  
 や、實に物質の起源、運動の起源、及び物質固有諸の勢力の起源はみな、目  
 に見えざるものの中に隠れあるものにして、此目に見ゆる天地宇宙は、  
 此れよりなるものは洪大なる一全軀の一部分たるに過ぎず、これよりな  
 るは洪大なるものより生れ出でしものとせざれば、決して説明すること能  
 はざる也。加之、凡て人々の觀察ところにより、殊に近世の凡ての研究の  
 證明する所にまれば、種々なる自然の勢力は、みな互に親密に關係し、其  
 形状は様々なるも、其實は凡て唯一の勢力なるが如し、而して自然界の  
 統一なることも明かなることなれば、その源因たる目に見えざるもの  
 も、唯なること決して疑ふ可らず。此の如く、吾侪の周圍にある世界に就て、  
 此の如く吾侪の周圍にある世界に就て、機をば研究し來りしが、茲に吾  
 侪の心中の經驗を審加へざる可らず、吾侪は天地宇宙の美はしきを考

察其諸の部分の互に都合好く適合する事、其種類の數限りなき事、其中に  
 深遠一致の存する事等を研究するときには、我侪の眼は非常に明かに  
 なり、我侪の考察力は非常に鋭くなり、我侪の見識は非常に闊大なり、此  
 目に見ゆる世界は吾侪の目前に繰れたる、一大教課書の如く、其教ふる  
 所の教課は之を學ぶ人々の智慧を開發、以て人生をして益々樂しく、尊  
 からしむるものなり。斯く肝要なる結果の生ずることは、決して偶然な  
 らざるべく、其教課の尊き事は、取も直さず、非常なる智慧を有する、一大  
 教師の存在することを願はすものにして、自然界が智慧ある思想より  
 生れ出でし事は、人間の自然界に關する思想によりて明かに證明せら  
 るゝなり。  
 以上論じ來れる諸の事實によりて考ふれば、此天地宇宙は自らより他  
 に一の原因を有し、其原因は如何なる性質に於ても、之より出で來りし  
 凡てのものより優り、從て智慧ある者たる事、決して疑ふ可らず、これ即

ち吾儕が活ける神と唱ふる者にして、人間が下等動物と異なりて、自ら存する心より、非常に優れたる心慮がこの天地宇宙と人間と動物との大原因の裏に存することを示すものなり。

- (一) 天地宇宙は一の智慧ある力によりて造られしことを證せよ
- (二) 諸なる自然の勢力と天地宇宙の起源との關係如何なるを證せよ
- (三) 又無機物、生物、物理性ある者の比較に就て論ず可きことをありや
- (四) 天地宇宙は唯一の源因を有することを證せよ
- (五) 自然界が人間に智慧を興ふることに就て論ずべきことをありや
- (六) 活ける神とは何をや

第三章

人間の良心

前に述べたる事實の他に、吾儕が自らの心中を直接に觀察して知る所の事實にして、注意すべきものあり。吾儕は屢人間の性質と行爲とに就て判決を下すことあり。此裁判は世の中にある凡ての裁判よりも、非常に優れたるものにして、例へば大なる災難と大なる罪惡とは、吾儕決して同一に見做すことなし。此二者は何れも不幸なるものなれども、全く種類の異なるものなり。此心中の裁判と、其裁判の基づく所の道徳の原則とは、實に吾儕自己の力を以て動かさ難きものにして、吾儕は随意に之を變更することも能はず。かの裁判廷に於ける裁判官の如く、既に定められたる原則に従て、是非とも判決を下さざる可らず。時としては、吾儕自己に不利益なる判決を下

ざる可らざることあり此の如き時に我儕は自らの心中にある裁判  
 官の前に於て罪人と定められ氣力は衰へ最早免るゝことも哀訴する  
 ことも許されざるが如き有様なり。かく吾儕の罪を定むる者は吾儕よ  
 りも非常に優れたる一大權威ある者の聲の如く感ぜらる。此權威  
 此權威ある標準に就て細事には多くの相違あるも大略に於ては萬世  
 萬國に通じて同然なり。蓋何れの國にありても何時の時代に於ても賞  
 賛するべき性質は必ず賞賛られ罪せらるべき行為は必ず罪せら  
 れて少じも相違あらざればなり。且又凡て極端なる場合即ち至極善き  
 か非常に悪きものに就ては吾儕は完全なる確信を以て判決を下し一  
 點の疑なくして或は善とし或は悪とする也。吾儕は問はんかく萬世萬國に通ずる最上權威は何物ぞや吾儕の力を  
 以て決して動かすこと能はず實に終局の權威ある此裁判の標準は何  
 處より來りしものなるや。

此は社會の法律より出でしもの非ず。何となればかく萬世萬國に通  
 ずる社會の法律は未だ嘗て有らざればなり。加之凡て國家の法律も必  
 らず先づ人間の良心によりて嘉とせられざる可らず。國家の法律に合  
 はずれば如何なるものにててもみな正義と稱す可らず。吾儕は時として自國の法律を破りて之よりも高尚なる法律に違ふ  
 者を賞賛することあり實に善と惡とを區別するところの無類の權威ある  
 ものに就ては社會の法律よりも尙他の原因を見出さざる可らず。或は又此善惡の區別は人間の行為より生ずる所の結果の良否に原因  
 のどなす可らず。若しも結果の良否に因りて善と惡とが別るゝもの  
 とすれば吾儕或る行為をなして不長結果を免るゝときは其行為は乃  
 ち善行となり不長結果を免るゝこと能はざるときは乃ち惡行となら  
 ざる可らず。加之吾儕が罪を犯かす可らざるの道理とては少しもなく  
 唯刑罰を免かれんが爲めに罪を犯かす可らずと云ひ得るのみ。されど



刑罰を免かれんことを唯一の原則となすが如き人は、何人にも賤められ、且罪ありとせらるる。かゝる吾儕自らも敢て違はんと思はず、他人の守るを見れば之を罪ありとするが如き原則は、決して眞理に基づかざるものにあらず。されば無類の威威あり、絶對的權威あるところの良心は、行爲よを生ずる結果の良否によりて説明す可らざるなり。罪は必ずしも惡しき結果を生ぜしむるものなれども、此事として決して説明せなすに足らず。蓋かゝる罪が必ずしも惡しき結果を生ぜしむる事實は、第一に説明さる可らざるものなればなり。此事實は物質世界を動かす諸の勢力によりては、決して説明す可らざるものなり。此の如く良心に關はれる事實は、自然界の勢力によりて一も説明し得る途なし。吾儕が他人に關し、自己に關する裁判を定むる所の標準と之を維持せしむるの權威とは、吾儕の周圍にある物質的勢力或は社會上勢力の中に見出さるることなし。此標準は即ち是等の勢力より、蓋か

優劣たる一太勢力の存在とを説明するもの事。今國の部族は、種々異なる。三種の顯象を見出せり。吾儕の權威は、第一に自然界の諸の勢力より、蓋かゝる罪が必ずしも惡しき結果を生ぜしむる事實は、第一に説明さる可らざるものなればなり。此事實は物質世界を動かす諸の勢力によりては、決して説明す可らざるものなり。此の如く良心に關はれる事實は、自然界の勢力によりて一も説明し得る途なし。吾儕が他人に關し、自己に關する裁判を定むる所の標準と之を維持せしむるの權威とは、吾儕の周圍にある物質的勢力或は社會上勢力の中に見出さるることなし。此標準は即ち是等の勢力より、蓋か

能く其力をあふるべきのなるが、其の支配を受けざる人々は自然界に解き放たれ  
 るべきに當り、其の意識の明瞭になるのみならず、其高尚なる道徳性も開發  
 せられ、漸く大なるものとなり、遂に其自然界と觸接するや多くは人種の  
 構造とその境遇とに應じられて然するなり。凡て人間の修養はみなその  
 自然界と觸接することによりて得らるるものにして、之によりて  
 人間の發達進歩あることなし。此大なる利益は人類一般に與へられし  
 賜物にして、此世に生活するの困難なるより人性墮落の傾向を來すこ  
 ともあれば、人類全体にとりては、かの賜物は遙かにこの傾向に勝る  
 ものなり。されば此宇宙に道徳的の目的の存在するときは、此事實はよ  
 りも確然たるべきなり。世に於て三人間の道徳的の目的は、其の  
 互に人間の行爲は、幸か不幸か、其結果を生じ、善行は  
 幸福を來し、惡行は不幸を生ずる。是れ人の心と行動とを相連する  
 點の世界に於ける位相の然らざる所なり。此事實は古今何れの時代

に於ても實に明々白々たることにして、或る人々は此事實を以て良心  
 の起源となせり。されど此説明の不充分なることは既に之を辨明せり。  
 然れども物質的世界は、良心の命令に違ふ所の人々に幸を興ふる機  
 に組成られたることを考ふれば、これも亦一の證據となりて、人の良心  
 と物質世界とは共に目に見えざる惟一の原因を有し、而して其原因は  
 智識あり且つ徳義あることを明かにするものなり。

問題

- (一) 人間の道徳的裁判を論ぜよ。
- (二) 人間の道徳的裁判は社會の法律に基づくかざることを證せよ。
- (三) 或は又人間の行爲より生ずる結果の良否にも基づくかざる事を證  
せよ。
- (四) 三種の緊要なる現象にして、みな目に見えざる勢力の作用を顯は  
すものを見し、而して三者とも惟一の原因を有する事を證せよ。



事は吾儕の真心の嘉しとするのみならず、至極必要とするところにも  
 成り、既結集の生ずる處は道徳の秩序は維持するも、然らざる處は道  
 徳の秩序の亂るゝが如し。  
 然れども現世に於ては此の噴瀾は甚だ不規則にして、層層人の榮ゆるを  
 定めり、又善人にして善をなすが爲に其生命をすら失ふもの少なから  
 ず、此の如き不規則なる事は何れの時代に於ても多の聖賢の心を迷は  
 せしめ、而して何れの時代に於ても此事に就ては同一の説明は與へられ  
 たり、曰く現世は人生の完結すべき處にあらず、死後完全なる賞罰は必  
 り各人の正に來るべしと、若し此の如くならざれば、かの善をなせし  
 が爲めに其生命を失ひし人々を對し、道徳的法律は大に負ふ所ありて、  
 決して償ふこと能はざるが如くなるべし、こは思想し得べからざるこ  
 となり、されば何れの時代に於ても義人の死せることあるは、死後の希  
 望あることを證明するものなり。

是に於て覺るべきあり、恰もこの物質世界は其自ら何處より出でたる  
 がを説明す能はず、吾儕の周圍に働きつゝある自然の諸の勢力よりも  
 幾層高太なる勢力(一個が數個か)の存せざる可らざることを證明する  
 が如く、現世に於て賞罰の不完全なる事も、亦人間の觀察力以外に存在  
 すべきものゝあることを證明せり、故に、かの世界を造りし勢力は自然  
 界の諸勢力よりも高太ならざる可らざるが如く、この未來世の存在も  
 現世の人生よりも非常に緊要ならざる可らざる故に、吾儕は切に死後  
 なる勢力と、此來らんとする入世とに就て、吾儕の知り得る所のものを  
 悉く知らんと欲するなり、  
 且又吾儕はみな目を墳墓を指して眺みつゝあり、而して各自自ら觀察  
 ることを覺る者なり、故に罪と刑罰とは連続して決して離れざることを  
 を深く感ずる所の念は、吾儕がかの暗黒き死の川に近づぐに隨て、心中  
 に大なる懼を生じて、此川を渡らば必らず過去の悪行に對する結果を

受けざる可らざることを覺る。之に反して、川 海 山 嶽 人 に 幸 福 の 興 つ ら る べき こと も 吾 儂 の 疑 は さ る 所 な り され ば 死 後 存 在 す べき もの も ある 事 を 覺 る ときは 心 中 に 一 の 新 し き 必要 を 感 ず る に 至 る 即 ち 吾 儂 の 過去 の 罪 に 對 する 未來 の 刑罰 を 免 れ ん こと 是 なり 吾 儂 其 善 人 に 興 つ ら る べき 安心 の中 に 入 らん が 爲 め に 罪 の 赦 を 得 ん と 欲 す 。

吾儂は直ちに他の必要を感ずるに至る吾儂は刑罰を恐るべきを以て善をなさんとするの心を奮起するなり。若し出来得ずれば、罪 を 爲 して 以 て 過去 の 怠 慢 を 償 は ん と て な り 然 れ ば 善 徳 善 を行 ふ と する の 力 は 其 熱 心 なる に 比 例 して 唯 吾 儂 の 道徳 的 に 虚 弱 と 及 び 罪 惡 に 束 縛 され つ ゝ ある こと を 願 は す のみ 過去 の 罪 は 吾 儂 を して 何時 までも 從 前 の 如 く 惡 し き 途 を 歩 ま し む る 所 の 勢 力 たる が 如 し 此 の 如 き 罪 惡 の 束 縛 は 吾 儂 を 墮 落 せ し む る もの に 似 て 一 度 之 を 感 ず る ときは 決 して 之 を 忍 ぶ 能 はず 必 らず 免 れ ん と 欲 する なり 且 之 に よ り て

吾儂は、かの來らんとする未來の刑罰を益々懼るゝに至る。故に吾儂は二重の救拯を要す。過去の罪の赦されん事と、現在罪の力より放たれん事これなり。

此の如き救拯は物質世界に於ても又は道徳的法律に於ても得られず、人間の歩まざる可らざる途を區劃する權威ある者は、此途を歩み外したる人々に對して慈悲を垂るゝこと決してなし。自然界なるものは、其造主の善なることを揚言すのみ、罪の赦に就ては少しも示すことなし。若し救拯の來ることありとすれば、此の如きものにあらざる他の途より來らざる可らず。然れども眞理なるものは、何處にありても皆調和せざる可らざるものなるが故に、吾儂の要する所の救拯も、自然界に於ける神の啓示と相調和せざる可らず。且つ道徳的法律にも矛盾することある可らず。此救拯を得んとするは即ち神學の實際上の目的なり。吾儂は自ら見ゆるものの中にも得られず、人間の道徳性の裏にも得られ

知る救拯を發見さんとの希望を以て、目に見えざるものに関し吾儕の  
知る得る所のものを悉く知らんと欲するなり。

知る所の問題

(一) 罪に對し未來刑罰のあるべき事を證せよ。

(二) 現世に於て賞罰の不規則なる事は何を證明するや。

(三) 吾儕は過去の行爲を記憶する事、現在善を行さんと力むる事とに

進止より如何なる必要を感ずるや。

(四) 何故自然界と良心とは右の必要を充たすこと能はざるや。

人間の進止より如何なる必要を感ずるや。

人間の進止より如何なる必要を感ずるや。

人間の進止より如何なる必要を感ずるや。

人間の進止より如何なる必要を感ずるや。

人間の進止より如何なる必要を感ずるや。



第五章

基督教とキリスト

目に見えざるものに就て前に陳たる如き思想は、獨り吾儕の有するの  
みならず、何れの時代に於ても、同様の思想を有せしもの少なからず、其  
思想は一定の形をなし以て、世界の種々なる宗教となり、其目に見えて  
顯はるるものは、かの諸處に建設せらるる所の社寺、及び人間の嘗て見  
しことなき想像上の人物に捧ぐる所の犠牲の如しかく、社寺を建て、犠  
牲を捧ぐる爲に、人々が莫大の費用を厭はざること考ふれば、その禮  
拜者等が、吾儕の周圍にある、この世界の裏面に、一層大なる、目に見えざ  
る世界の存在する事を、確信すること明かにして、吾儕が前章に論じた  
る所と一致するものなり。かの目に見えざる世界の幸福を得んが爲め  
に、地上の一切の幸福をば喜んで棄て去り、且生命さへも惜まざるもの、

其例少なからず、而してかく目に見えざるもの、實在することを明せ  
 る確信は、人間を高尙ならしむる所の、強き道徳上の力となること、其例  
 甚だ多し。これ即ち人間を正義することなり。  
 世界に於る凡の宗教の中にて、著しく秀でたる位置を占むる所の、  
 宗教あり。基督教を信ぜざる凡の國民は、現今も、過ぐる一千有餘年間も、凡  
 て地上に於て最も善良なるものに關しては、實際專有權を有し、殊に絶  
 え間なき進歩をなせるもの也。  
 太古基督教を信ぜざりし諸の國民の有せし善良なるもの、基督教國  
 民の有するものとを比較するときは、基督教國民の絶え間なく進歩す  
 ること一層明かなり。例へば希臘の美術及び文學、羅馬の武力及び政治  
 上の力を見よ。太古の諸國に於ては、絶え間なき進歩のありしことなし。希  
 臘國民は其隆盛の花の開くや否や、希望なき零落の中に枯れ果てたり。  
 羅馬帝國は其國民の自由を壓倒して其上に建てしものなりしが、久し

からずして内部に腐敗を生じ、其結果として、國力衰へ北方よりせる烈  
 しき攻撃者の餌となり終れり。然るに基督教國民の歴史は一千有餘年  
 の間進歩の歴史たらざるはなし。或國民にして退歩の時期を有せしもの  
 のなきにしも有らずと雖も、凡の基督教國民全體としては、明に前進せ  
 るものにして、其中一國民だも全く後に退きしものなし。今日文學、科學、  
 美術、政治、武力等の最も高尙なるものは、かの十字架に附けられし者  
 人に最高の權威あることを信認せる國民に於て、之を見るのみ。凡て  
 其他の國民は、みな望なき零落の中に沈みつゝあるか、然らざれば印度  
 の如く基督教國の補助によりて、高擧られつゝあるなり。  
 かく基督教國民の無類に優るゝことは、人種又は氣候によりて説明さ  
 る可らず。例へばアリアン人種にあらざして基督教を信ぜざるハンガ  
 リヤ人は、アリアン人種にして基督教を信ぜざる、ペルシヤ人及印度人よ  
 りも遙かに進歩せり。土耳其人は歐羅巴中、幸福なる位置を占め、且つ基

督教國民と密接せり然れども基督教を退けて之を信せず而して他の  
 凡の歐洲國民の遙か背後に唯獨り逡巡せり之に反して土耳其の權力  
 を脱したる諸國民は皆進歩の途に就けりさらば今より基督教國民の  
 秀でたることは氣候人種によりて説き去る能はざるにより今他の説  
 明を掲げん  
 此説明を掲げんが爲めに過去の歴史を顧るべし夫れ基督教は今より  
 殆んど一千九百年以前に其名の著しからざる一國の宗教より不意に  
 出で來りしことを明かなりイスラエル國の宗教は凡て他の宗教より遙  
 かに優れたる書物を有し其書は今日に於ては最も智識あり且敬虔な  
 る基督信者に最も高尚なる心靈上の利益を與ふるものなりと雖も  
 リストより以前の時代にありてはかくも尊き書物を有する宗教も其  
 隣國に感化を及ぼせしこと至極稀なりき然るにユダヤ國の首長等の  
 殺戮せし人の其弟子等の説教せし結果として突然シロの水は溢れて

其境を破り全世界に奔流して從來荒れ果て且零落せし所をば道徳的  
 及び心靈的に豊饒ならしめたりキリストの御名の崇めらるる所にて  
 は何處にもソオンの歌の歌はるゝあり若し其歌の基督信者の口より  
 歌はるゝことなく或は基督教文明の感化を受けざる所には荒敗零落  
 は依然として存せり  
 かく著しき結果あるは其源因をナザレのイエスに歸せざる可らず何  
 どなれば凡ての基督教徒の言行並びに思想はみな彼を指して基督教  
 より出づる一切の幸福の唯一の源泉となせばなり他の宗教に於ても  
 一個人なる開基者を有すと雖も基督教の如く唯一個人の人によりて全  
 く活かざるものなし而して基督教は全くキリスト一個人の感化力  
 に基けるものなるが故に彼は其世に出で來りし時代に於て望なく零  
 落の中に沈みつゝありし所の吾儕人類を救出し人間歴史の進行を轉  
 ぜしめて進歩を隆盛の新しき路に就かしめたりと云ふも敢て過言に



あらざるべし。蓋、吾儕の既に記し、如く、進歩と隆盛は、唯キリストの權威に從ふ國民にのみ存すればなり。

基督教の此世に起り、莫大なる結果を生ぜしめし事の實に驚くべき他の理由あり。古代の基督教記録を見て考ふるに、其開基者たるイエスは、未だ壯年に達せざる時に殺され、其殺されしより三年以前までは、アラヤの僻邑に於て、名の知られざる、一個の職工たりし事なり。彼が青年なる少數年間に於て、人々に與へ給ひし感化力は、人間の思想の積漸を全く轉ぜしめ、人生の状態を全く變ぜしめたるなり。かくも絶大なる變化が、ナザレのイエスなる一個人の感化力によりて生ぜしことを考ふれば、彼の裏には、從來此世に存せし所の社會的及び宗教的勢力よりも、遙かに高大なる一の勢力の存すること疑ふ可らず。是即ち生命を生ぜしめし勢力は、従前無機物界に働かし、諸勢力よりも優る、所以と同一理なり。

吾儕は問はん、イエスは何物ぞ彼は誰なるや、如何にしてかくも少數年間に於て、かくも驚くべき感化力を出じ、凡て爾後の時代に及ぼすことを得じや、彼は目に見えざる世界と、死後の生命に就て論ぜしこと實に少なからざるが故に、吾人の疑問は二層大切なるものなり。甲の一層は、

(一) 世上の諸宗教は、人間が目に見えざるもの、實在を確信するを證するがその理由を擧げよ、

(二) 基督教の無類に超絶せることに就て著しき證據を擧げよ、

(三) 歴史が此證明を確むる所以如何、

(四) 如何なる意味に於て、キリストは世界を救ひしや、

(五) キリスト生涯の傳記を知るときは彼の感化力の一層驚くべき所以を述べよ、

第六章

基督教の文書

キリストは遙かに一千數百年以前の人物なるが故に、吾儕が彼に就て學ばんには、書物によるの外なし。

諸キリスト自らの筆に成りしものは一もあるなし。然れども最初の基督教々師の中、最も著しき聖パウロの記しゝものと稱せらるゝ書翰は十三個あり。凡て是等の書翰は、第二世紀の終らざる以前に、佛蘭士、埃及、カセイヂ等の如く、非常に隔たれる所に於ける多の記者等が、一點の疑なく、眞實聖パウロの記しゝものと認めたるものなり。其中の一書、哥林多前書は、今も尙存する所の第二世紀の始に於て、羅馬教會より、哥林多教會に送られたる書翰の中に、パウロの書として、明かに引照せらる。此は明確なる書物以外の證據は、之と等しく明確なる所の書物内部の

證據によりて確めらる。此證據は實に完全なるものにして、某書翰の中、少くとも四個、即ち羅馬書、哥林多前後書、及び加拉太書は、何れの時代に於ても凡の學者によりて、眞實パウロの記しゝものと認められ、聖パウロの教訓中の最も著しき要素を、誤謬として信ぜざる所の、或る人々すら、然か承認せり。

此外、パウロの名を有てる諸書翰をも、眞實彼の記しゝものと認むべき、明確なる理由あり。

又今日吾儕の有する所の是等の書翰は、記者の手づから記しゝものと、實際同一なる事も、古代の無數の寫本の、大體に一致するによりて、明かなりとする、かく保存せられたる是等の書翰は、吾儕の今なさんとする研究に於て、非常に價値あるものなり。蓋是等の書物により、吾儕は直ちに、かの大使徒の目前に至り、彼がキリストに就て有せし思想と、彼自らの智識と、徳行とを、明かに検査することを得ればなり。吾儕は直ちに、かの

記者が鋭敏なる智識と公平なる判断力と高尚なる品性とを有せしことを感じ、彼は實に吾儕の尊敬すべく、確信すべき證據大にして彼の諸の書翰により、吾儕は、キリストと同時代に生存せし其弟子等の中、多分最も多く力ありし所のパウロが、キリストに就て有せし觀念を描出すことを得べし。

此外又キリストの生涯と死との記事を載するものと稱せらるる四篇の傳記あり、馬太傳、馬可傳、路加傳、約翰傳これなり。又最初基督教會の建設せらるるに至りし記事を載する一書あり、これ即ち使徒行傳にして、其書中にある證據により凡の傳記は一致して、常に之を第三福音書の記者ルカの記しむものとせり。凡て是等の書物の中には記者の名記されず、然れども凡て初代の基督教の記者等は、第一福音書と第二福音書とを、使徒等の伴信にして有名なる者の記しむものとせり、この記者

に關する傳記は第二世紀以後、何れの國に於ても、凡ての古き基督教記者等が、完全なる確信を以て承認せしものなり、かく多の人々の一致するによりて考ふれば、是等の書物は、彼等の時代に於ても既に古き書物たりしこと明かなり、而して是等四個のキリストの傳記の互何處にも權威あるものと認められ、他に此の如きものなき事、及び何處に於ても少の異論なくして、同じ記者の名の此書物に附せらるることと考ふれば、此因書は初代の基督教文學の中、無類の位置を占むること明かなり、此他新約書の中に他の諸の書翰より、又著しき預言書一冊（歌示錄あり）と異なるものあり、其體裁もパウロの書翰とは大に異なる、是等の書物はみな、其言辭も、其思想の體裁も、パウロの書翰とは大に異なる、故に他の記者によりて記されし事明かなり、されは新約全書の中には、キリストの教訓を要求せし就て、各篇立せし證據は、其數甚だ多し、かく種々様々なる證據の存することは、最も價値あることなり、何と

なれば是等の様々なる證據あるにより吾儕はパウロの書翰の中より、  
 聖パウロ自身が特別に教へし部分を除去し、以て彼の教へたる福音を  
 手段としてキリストの實際の教訓に達することを得なければならぬ。  
 是等の書の思想と言辭とは非常に相違すと雖も、其根柢には著しく  
 一致する所あるが故に、此新約書の種々なる記者等の普通に有せる要  
 素に於て凡て此他の古き教訓又は新約書を同時代の教訓と全く等  
 視するものは實に基督教開基者の口より出でしものと決して疑ふ可らぬ。  
 故に基督教の文書は吾儕を導き、キリストの面前に至らしむるものな  
 るものあり。これ即ち舊約全書にして、其中には歴史あり、預言あり、詩歌  
 あり、教訓ありて、其種類甚だ多く、其編製もれしこと數百年に亘り、凡て  
 宗教的生活となせし者、福音の日の眞に於て、深奥なる教訓を以て

顯はしたるものなり。此書は新約全書の中に、宗教に關し終局の權威あ  
 るものとして、引照せらるゝこと甚だ多し。  
 以上記載排列たる材料は、基督教神學の正當なる研究方法を與ふるもの  
 なり。吾儕は古の基督教文書を綿密に研究して、各の記者がキリストに  
 關して有せし觀念、即ちキリスト自らの要求と、彼が宣傳し福音に就  
 て種々なる記者等の抱きし觀念を、各別々に描出すことを力めざる可  
 らず。是等の種々なる而して稍相違せる觀念をば、比較し且結合し以て、  
 キリストが實際要求せし事と、實際教へし事とを學ばざる可らず。而し  
 て事實を敘述せざるものは、凡て吾儕自ら觀察する所の事實に關するあ  
 らぬ。敘述を試檢するが如くに、之を試檢せざる可らず。此研究法によ  
 るときは、かの著しく人類を救出し之を祝福せし所の宗教的大衝動を  
 生ぜしめたるキリストの教訓と、威嚴とに就て、聰明なる確信を確固たる  
 基礎の日に建つることを得べし。



ては、時々死後完全なる賞罰あることを論ずるあり。此事實はキリストの明かに教へしものにして新約全書中に記さる。此の如く吾儕自らが物質世界を見現世の賞罰の不完全なるを考へて、推量せし議論は古に於て教へらるゝあり、又古今未曾有の大成功ありし一大宗教家の教によりて確めらる。

キリストの談論には道徳的教訓多し。彼は死後の賞罰に就て教へしのみならず、其聽衆が刑罰を免かれ永生を得んが爲に爲さる可らざる事と爲す可らざることを告げ給へり。夫れ一切の道徳的教訓は、人間の良心によりて、其是非を判別せざる可らず。蓋吾儕の既に論じたる如く、良心は人間の行爲を裁判するに最も力ある者なればなり。吾儕は直ちに問はん、キリストの道徳的教訓は、人心の中にある裁判官によりて、如何に判決せらるゝや。

此裁判は明確なり、キリスト及び新約全書の道徳的教訓は、悉く正しく、

善く且高尚なること明かなり。加之、其教訓は吾儕自らの良心を高尚にし之を強くし、以て一層高尚なる權威を與ふ。吾儕新約全書を開て、其中に語り給ふ大教師の聲を聞くときは、吾儕の裏に位して善惡を判別する裁判官も、彼の前に跪き己よりも大なる者の如くし、彼の命を受くるときは、一層高き位に上るに至る。かく吾儕の裏にある最も高く最も良きものをも、尙高擧め且強むる所の聲は、實に吾儕の主たり、師たる者の聲なる可きこと、吾儕の直ちに認むる所なり。

此の如き感は數言を以て説明かすこと難し。されど吾儕の第一に認むることとは、その道徳的教訓の單簡にして威嚴あることなり。即ち細事を掲ぐることもなく、一般に適用することを得べき大原則を論定せられたり。人間の義務の如きは全軀總活して専心一意神と其王國とに忠を盡し、萬人に對して善を實行すること、なざるゝなり。而して道徳なるもの、範圍は人間の外部に顯はるゝ行爲と、其内部の心狀とにあるなり。

キリストの最も高尙なる言辭の或るものが舊約全書より引用せられ、  
たることは注意すべきことなれどもキリストが之を引用せるより、其  
言辭の道德的勢力は非常に増加せり。又此他の古き文學の中にも高尙  
なる道德的教訓を有すること少からずと雖も、實際人生の指南車とし、  
且つ全軀としては、新約全書が一切の基督教以外の教訓より遙かに上  
に位すること、何人も疑はざる所なり。

加之、新約全書に描出さるゝキリストの人物は、右に述べたる高尙なる  
道德的理想が、現實の人性となりて顯はれたる、完全なる者に異ならず。  
此書中に於て、如何なるものにて、凡て高尙なる人性に就て記さるゝ  
ものは、皆ナザレのイエスの人物に於ける一性質にあらざるはなし。神  
が彼を世に遣はして爲さしめんとせし事業を爲し終り、而して願ふ者  
には、凡て最も高尙なる祝福を與へて之を富ましめんとするは、彼の有  
せし一の思想なりき。彼は絶えず陰かに企てられたる残酷なる謀計を

蒙りたれども、少しも憤怒の言辭を出せしことなし。此書の第九章に至  
らば明かなる如く、彼は神の生み給へる獨子にして、自らが生來有する  
所の特權を棄て、地上に於ける人間の性質たる、制限と虚弱とを自ら取  
り、終に残酷なる死を遂げたり、これ人々を救ふて、其罪に對する刑罰を  
免れしめ、以て永遠なる神の王國に導かんとてなり。此大なる献身的の  
働をば、神に従順なる諸の行爲、或は人間を受する様々の行爲に比較す  
るときは、後者は恰も無きが如きものたるべし。實に新約全書中に描出  
さるゝイエスの生涯と死とは、最も高尙なる人性の完全に顯はれたる  
ものなり。

キリストの道德的教訓はかく壯嚴なるが故に、死後の賞罰と、天に在ま  
す父とに就て教へ給へる彼の教訓の正當なることも、從て明かなり。何  
となれば彼の道德的教訓は吾人の非難することなく、又非難すること  
能はざるものなるに、道德と密接に關係せる、未來の賞罰、天父の存在の

教は全く誤謬なりとは、實に信じ難きことなればなり。而してキリストの教訓の誤謬なき事は、其世界に感化を及ぼせしことによりて、明かに確めらる。即ち基督教を信する多くの國民の無類に超絶せるが如し。此の如く二重に確められたる教訓は、吾儕確信を以て、之を眞實のものと認むることを得べし。

然れども吾儕が此く第一に研究せしことの結果は、實に價値あるものなれども、吾儕の切に要する所の心靈上の需要を直接に充たしむるものにあらず。吾儕は未だ罪の赦に就て聞しことなく、吾儕を墮落せしむる所の罪の束縛を免かれしめんとする約束に就て聞しことなし。實にキリストの高尙なる教訓と模範とは、反て吾儕をして自らの達せざる可らざる所の理想よりも遙か下方に沈淪つゝあることを覺らしむるのみ。此高尙なる模範を見、之に勵まされて、將來善行をなさんと力を盡すも、唯益々切に吾儕の道德的力なきことを感ずるのみ。吾儕はこの活

ける模範の目前に於て、罪人と定められ、力なく横はりて少しも補助を受くることなし。この模範は、吾儕の之に倣はんことを嚴しく命ずると雖も、自らは然かするの力あらざるなり。

之に反してキリストは、神の善及び恩恵に就ても教へ給ひしこと少からず、而して補助を要する者には、凡て之を與へんと約束し給へり。彼曰く、凡て勞たる者また重を負る者は、我に來れ、我なんぢらを息ません。馬太傳十一章二十八節と、夫れかく語り給ふイエスは、無類の威嚴ある者なるが故に、その約束し給へる事も、之を實行し給ふの力あること疑ふ可らず。神の恩恵は果して、罪人に罪の赦さるゝ途を與へ、囚人の如きものに、其束縛を脱することを得せしむるや、否や、吾儕之を知らんと欲す

問題

- (一) キリストは新約全書に於て神に就て如何に教ふるや、
- (二) キリストの教訓は、如何なる裁判廷に於て其是非を試檢すべきや、



- (三) 其裁判の結果如何、
- (四) キリストの道德的教訓の著しき要素を擧げよ、
- (五) 新約全書に於て、道德の顯はれたるものにして、キリストの道德的教訓よりも高尚なるものありや、
- (六) 凡て是等の事は、神と未來とに關するキリストの教訓に關係を及ぼすや、
- (七) キリストの道德的教訓は吾儕の救はるゝ事に關し如何なる勳をなすや、



### 第八章

#### キリストの福音

吾儕は今より凡の時代に於ける凡の宗教書類に多少普通なる所の事實を離れてキリストと新約全書とが特有するところの教訓を研究せん。

羅馬書一章十六節十七節に福音の簡單なる説明あり、この福音はパウロがローマに於て宣傳へんと欲せしものなり。彼曰く此福音はすべて信ずる者を救ふとの神の大能にして、神の義は此に顯はれて信仰より信仰に至れり。録して義人は信仰に由て生べしと有が如しと。此後パウロは人間の此救を要する所以を證明して、暫く福音の記事を中止すと雖も、三章二十一節二十二節に至りて再び之を著しく記せり。曰く今法律の外に神の人を義とし給ふことは顯はれて律法と預言者は其證をなせ

り即ちイエス、キリストを信ずるに由て其義を神は凡ての信者に賜ふて區別なしと。かく丁寧に再言ふことを考ふれば、此言辭の中にパウロの了解たる福音の大原理の存ること疑ふ可らず。同章二十六節、二十八節、三十節には、その言辭少しく異なれども、同じ意味の言辭を以て總括らるゝ同一の教理あり。曰く、人の義とせらるゝは信仰に由て法律の行に由らずと。四章五節には他の言辭を以て説明さる。曰く、工なき者も不義なる者を義とする神を信じて其信仰を義と爲れたりと。これに同じき教訓は加拉太書二章十六節、三章八節、二十四節にあり。又使徒行傳十章三十八節、三十九節にも、聖パウロの説教を記せるうちに顯はる。曰く、然ば人々兄弟よ、此人に由て罪の赦の爾曹に傳れるを知れ、爾曹モトセの律法に依て義と爲るゝこと能ざる凡の罪も、信ずる者は皆かれに由て赦され、義とせらるゝ也と。夫れ新約全書の中に、信仰に由て義とせらるゝことを論ずる者は、聖パウロより外にあらざるが故に右に掲げ

たる最後の言辭は、特に著しきものなり。吾儕は今問はん以上、追跡して、パウロの筆に成り、パウロの口より出しものと認めし所の言辭は如何なる意味なるや。此答は、彼の時代に於て、彼が往來せし社會にありて、是等の言辭の普通に用られし意味より探出さる可らず。

舊約全書に於て、義とするといふ言辭は屢用らるゝのみならず、常に同一の意味にて、即ち人間を義しき者と見做し、義しき者と揚言し、義しき者として取扱ふをいふ。約百記三十二章二節に曰く、ヨナ神よりも已を正しとす。又三十三章三十二節に曰く、なんぢもし言ふべきことあらば我にとたへよ、請ふ語れ、我なんぢを義とせんと欲すればなりと。耶利米亞記三章十一節、以西結書十六章五十一節、五十二節にも同じ言辭あり。同じく申命記二十五章一節に曰く、人と人との間に争辨ありて來りて審判を求むる時は、士師これを鞠き、その義き者を義とし、悪き者を悪

と云へしと。箴言十七章十五節に曰く、悪者を義とし、義者を悪しとする。この二の者はエホバに憎まれると。尙、列王記上八章卅二節、以賽亞書五章二十三節、歴代誌下六章二十三節、出埃及記二十三章七節、以賽亞書五十五章八節、路加傳七章三十五節、十章二十九節、十六章十五節等を比較せよ。是等の聖句中にある義しくするといふ言辭は、人を實際義しき者となすに非ず、思想か、言語か、行爲か、に於て、人を義しき者の如くに取扱ふを謂ふこと明かなり。義とすることは、即ち裁判官が人の利益となる判決を下すことなり。故に羅馬書四章五節に「不義なる者を義とすることあり、又使徒行傳十三章三十八節、三十九節に「罪の赦とあるは、全く此義とすることなり。言辭を換へて言はんには、パウロの明かに、且大切に考へし所に、よれば、神は凡てキリストの宣傳へたる善き音信を信する者を嘉し給ふなり。

六第四福音書がイエスに愛せられし弟子によりて、記されしことは、第二

世紀頃より以後の傳説によりても、又は其書の内部にある確なる證據によりても、明かなることなり。諸此書物の中には、義とすることといふ言辭見えず。然れども、約翰傳三章十六節には、それ神はその生たまへる獨子を賜ふほどに、世の人を愛し給へり。此は凡て彼を信する者に亡ぶることなくして、永生を受しめんが爲なりとあり。又約翰傳三章十八節、三十六章、五章二十四節、六章三十五節、四十七節、十一章二十五節にも、同様の言辭あり。凡て信する者に永生を賜ふといは、其中に罪の赦をも含むなり。何となれば、萬人罪を犯したるが故に、罪の赦さるゝにあらざれば、神に嘉せられて、永生に入ること能はざればなり。約翰第一書一章九節には、凡て自らの罪を告白するもの、罪の赦を得べき約束を記さる。而して二章十二節には、既に罪の赦されたる人々の事を記せるあり。之を要するに、約翰傳とパウロの書とは、言辭は全く異なるが故に、各文書の全く獨立せることを證するも、パウロの根本的大教理に至りては、第四福

音書中に明かに、且著しく記され、之を以てキリストの教となせり。  
 馬太傳六章十四節、九章二節乃至六節、十二章三十一節、三十二節等に記  
 さるゝキリストの言辭によりて見れば、彼は罪の赦を約束し、之を宣傳  
 へ給へり。馬太傳二十六章廿八節に記さるゝ如く、彼は最も嚴肅なる場  
 合に於て、「これ新約の我血にして罪を赦さんとて衆の人の爲に流す所  
 のもの也」と曰へり。同様の約束は馬可傳二章五節乃至十節、三章二十八  
 節、十一章廿五節、路加傳五章廿節乃至廿四節、七章四十七節乃至四十九  
 節、十一章四節にも記さる。始の三福音書に於ては、第四福音書に於て、信  
 仰と永生とが著しく連続する如くに、信仰と罪の赦とは著しく連続す  
 ることなし。然れども信仰は常に神の祝福を受けるの途たらざることな  
 し。例へば馬太傳九章廿二節に「女よ、心安かれ。爾の信仰なんちを愈せり  
 」とあり、其二十九節に「爾曹の信ずる如く、爾曹に成べし」とあるが如し。  
 諸これ等種々の證據人の呈する證據を集め、尙之に加ふるに、新約全書

中にある、此他の獨立せる文書に記さるゝものを以てし、而して此全書  
 を試験するに、凡て吾儕自らの觀察ること能はざる事實を試験する原  
 則を以てせば、其結果如何なるべき。凡て是等の事實を説明し得る途  
 は唯一個あるのみ、殊に非常に相違せる各書の根底に、深き調和の存す  
 ることは、左の如く説明さざれば他に説明の途なし。曰く是等種々なる  
 證據人の普通に有する要素は、唯一の源泉より來りしものにして、其唯  
 一の普通の源泉は、キリストの實際の教訓なるべしと、言を換へて言は  
 せ。神は凡てキリストの宣傳へたる善き音信を信ずる者を嘉し給ふべ  
 しと、キリストの教へ給へることは、實に歴史上の事實なり。  
 此教理の如く著しき教理にして、等しく新約全書中に明かに記さるゝ  
 ものあり。パウロは羅馬書三章二十一節、二十二節に於て、信仰に由て義  
 とせらるゝ事を述べたる後、進んで二十四節乃至二十六節に於て、教へ  
 て云く、神はキリストを立て、挽回の祭物となせり、即ち其血を信ずる者

の挽回の祭物たる也、神の此くなし給ひしは、イエスを信ずる者を義とするとも、尙みづから義たらん爲なりと、之に由て考ふれば、若しキリストの死なかりしならば、信者の義とせらるゝ事すら、神の義と抵觸あり、従て神は不義に在まし得ざるが故に、人間を義とすることは、全く出来得べからざることをたるべし。故にキリスト若し死ざりしならば、吾儕人間は死ざる可らず。聖パウロが二十四節に於ても、其他の所に於ても、キリストを以て吾儕を贖ふの價となせしは、當を得たるものなり。是と同様の教訓即ち吾儕の救拯は、キリストの死と血とに由りて來る事、及び彼は此目的を以て死給ひしことは、パウロの凡の書翰及び希伯來書の中に貫徹れり。此教理もキリストの教訓中の著しき要素たること明かなり。

勿論此教理はキリストの死後書されたる書翰の中に著しきものなれども、彼が生存中に語り給ひし談論の中には、左程著しからず、然れども

彼の死が吾儕の生命を得るの途たる事は、約翰傳第六章五十三節乃至五十六節に記さるゝ著しき言辭の中に明かに教へらる、曰く「若し神の子の肉を食はず、其血を飲ざれば、爾曹に生命なし」と。十章十五節十七節、十一章五十一節、十二章二十四節にも然り。パウロの記したるものゝ中にも、約翰第壹書一章七節の如く、意味の強きものなし、曰く「其子イエス、キリストの血、すべて罪より我儕を潔む」と。記者の意は、キリストの血の流さるゝことなくば、吾儕の潔めらるゝことなきにあること明かなり。凡て此教理と最も大切なる一致をなすものは、共觀福音書(始の三福音書)即ち馬太馬可路加を謂ふに記さるゝ、主の晩餐の設られたる記事なり。馬太傳二十六章二十八節を見るに、馬可傳十四章廿四節を比較よ、キリストは「これ新約の我血にして、罪を赦さんとて衆の人の爲に流す所のもの也」と曰へり。路加傳二十二章二十節にも、之と同様に「此杯は爾曹の爲に流す我血にして、立る所の新約なり」とあり。此の如く、キリストは人

間を救ひ、其罪に對する刑罰を免れしめんが爲に自ら死給へりとの聖  
 びの著しき教訓は、四福音書の各に於ては、キリストの口より出  
 しものとして記さる。尙馬太傳二十章廿八節、馬可傳十章四十五節にあ  
 る、おほくの人の代て生命を予、その贖とならんといふ言辭を比較し、彼  
 得前書一章十八節、十九節には、なんぢらの贖はれたるは……寶血に  
 由るとあり、而して其二章廿一節乃至廿四節、三章十八節及び黙示録一  
 章五節、五章六節、九節、七章十四節にも同様の言辭あり、此の如く種々な  
 る記者等が、此著しき教理に就て全く一致することによりて、キリストは、  
 此教理の實際、キリストの救なること疑ふ可らず。  
 之と等しく著しき教理あり、即ち神は凡てキリストの言辭を信する人  
 々に、其靈を與へ、以てキリストの如く神に奉事ふる所の新しき人間と  
 ならしめ給ふことなり。羅馬書八章二節に曰く、活す靈の法はイエス、キ  
 リストに由て罪と死の法より我を釋すと。其九節に曰く、凡そキリスト

の靈なき者はキリストに屬ざる者なりと。其十四節には、凡そ神の靈に  
 導かるゝ者は是すなはち神の子なりとあり。又加拉太書三章十四節に  
 は、我情も信仰に由て約束の靈を受んとあり、其四章六節には、神その子  
 の靈を爾曹の心に遣るとあり、其五章二十五節には、若われら靈に由て  
 生なば亦靈に由て行むべしとあり。此他同様の言辭甚だ多し。約翰傳七  
 章三十九節に曰く、如此いへるは彼を信する者の受んとする靈を指る  
 なりと。又馬太傳三章十一節に曰く、彼は聖靈をもて爾曹にバプテスマ  
 を授けんと。  
 以上全く歴史的方法を以て發見したる證據は、キリストが左の三條  
 を教へしことを確むるものなり。第一、神は凡て福音を信する人々をば、  
 其過去の罪あるに拘はらずして之を嘉し給ふべし。第二、此罪の赦はキ  
 リストの残酷なる死より來るものなり。第三、神は凡て信する人々に、聖  
 靈を與へ、新しき人間となして、神に對し忠實ならしむ。夫れ新約全書の

記者等も初代の基督教徒も一般に、此三教理を以て、キリストの教なりと確信せしことは、等しく確實なることなり。

吾儕は直ちに認む、是等のキリストの言辭は、之を眞實と信ずる人々に、凡て其人々の要する所のものを與ふるもの也。實際罪あることを自ら覺り、刑罰を懼れて、神の怒の下に戰慄る人々に對し、キリストは罪の赦を與へんと約束し給ふ。人間を墮落せしむる所の罪の束縛の下に呻吟く人々に對しては、彼は道徳的に自由なる新しき生命を與へんことを約束し給ふなり。

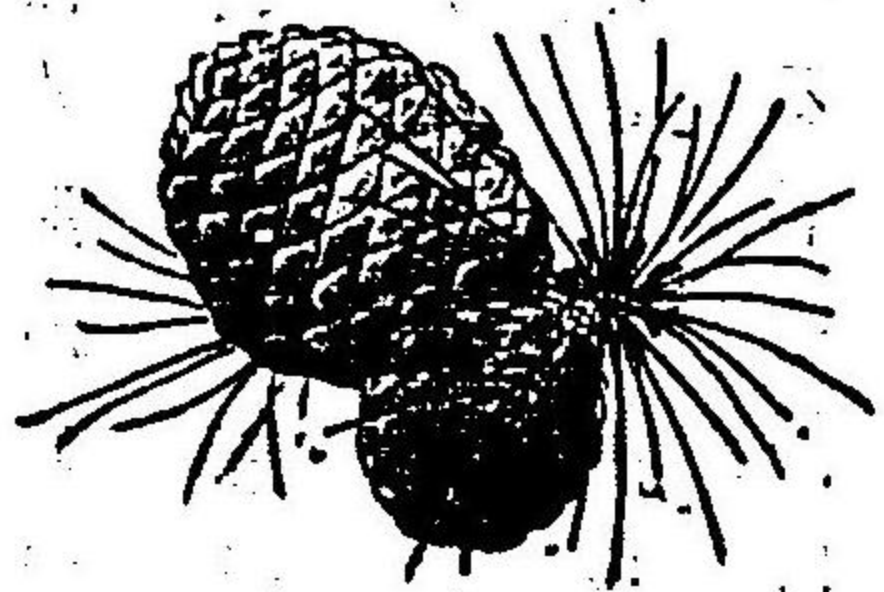
今や、殘る所の問題は、唯一個あるのみ、吾儕は、此善き音信をば、之をキリストの言辭なる事を唯一の證據とし、以て眞實と認むるや否や、吾儕は既に彼の垂示給へし道徳的教訓の莊嚴なること、その模範の卓越なること、基督教の廣く世界を感化せしこと等を研究せしが故に、彼が明確に約束せし事をも、彼は之を成就し得べしとは、容易に信ぜらるゝこと

なり、何となれば、此くも高邁たる教師の教訓の最も著しきものが、誤謬の集合物なりとは、實に信じ難きことなればなり。然れども此教理を信ずると否とにより、其結果に非常の差異を生ずるものなるが故に、吾儕は尙研究せざる可らざることなき能はず。即ち、キリストの自ら曰ひし所の人の子なる者は、地上に於て人の罪を赦すの權威あることを證する所の完全なる證據を發見せざる可らず。故に吾儕は、謹み慎みて問はん、ナザレのイエスは如何なる者ぞ、彼は如何なる權威を以て、罪人に罪の赦を與へ、囚人に自由を與へんと曰ひしや。

問題

- (一) 聖パウロの著しく教へたる三大教理を記せ。
  - (二) キリストも亦此三教理を教へたることを證せよ。
  - (三) 聖パウロの所謂信仰によりて義とせらるゝことの意味如何此答
- 理由を添へよ。

- (四) 救拯がキリストの死に由る事は、パウロの書翰に著しく記さるゝ
- (五) 此三教理はキリストの道徳的教訓によりて確めらるゝことある



### 第九章

#### 神の子

吾儕は今より、新約全書に書さるゝ所の、キリストの要求と威厳とを描出さんとす。

吾儕の直ちに認むることは、聖パウロが非常にキリストを尊崇しこと也。パウロはキリストを以て、最大最良の人間よりも、無窮に大にして且神に無窮に近接せるものとなせり。此威厳は、神の子といふ名稱を以て顯はさる。例へば羅馬書一章三節、四節に、其子は肉體に由ばダビデの裔より生れ、聖善の靈性に由ば、聖りし事によりて、明かに神の子たる事顯はれたりとあるが如し。我儕の爲に死給し者が、神自らの子たることは、八章三十二節に於て、神の大なる愛の證據とせらる。三節をも見よ。是即ち神が他の者を救はんが爲めに己れの子を棄て、死しめし意味な



るが故に、キリストの死によりて救はるべき人類は神に對して、キリストの神に對するが如く親密ならざること明かなり、實に聖パウロは其書翰の始より終まで、常に神の子といふ言辭を用ひて、キリストの著しき名稱となせり。同様に希伯來書三章六節に於ても、キリストは古唯一の忠義なる僕たりしモーセに比較して、子と稱へらる。哥林多後書五章十節には、キリストの世を鞠き給ふべきことを記せり。曰く「我儕必ず皆キリストの臺前に出で、……各々身に居て爲し所のこと、に循ひ其報を受べき者なれば也」と。腓立比書三章廿一節を見るに、彼は其再び來り給ふときに、其僕等の死躰を化しめて、自らの輝ける身躰の如くならしめん。哥羅西書一章十五節乃至十七節に於て、聖パウロ論じて云く、キリストは天使よりも前に存在せり、種々なる位ある天使等は彼によりて創造られ、且その創造られたるは彼の爲なりと。

キリストに關する觀念にして、實際右に記したるものと同様なるもの之

よりも一層充分開發せしものは、第四福音書に見ゆ。此書に於てキリストは屢人々をして、彼自らに注意せしめたり。例へば自をば「生命のパン」、「世の光」、「善き牧者」、人の神に至るべき唯一の途、「復生」生命など、稱へたり。

(約翰傳六章三十五節、八章十二節、十章十一節、十四章六節、十一章廿五節)。

而して彼は常に自らと其弟子とを區別するも(二十章十七節を見よ)自らと天父とを一の代名詞の中に結合せることあり。即ち十七章十一節、廿一節、廿二節等に「聖父よ、……我儕の如く彼等をも一になし給へ」とあるが如し。

キリストは自らを神の子と稱へたり。而して彼の敵は此名稱を以て自らを神と等しくすることとなせり。(五章十八節、十章三十三節)然るにキリストは此敵の推量をば誤れり。曰ひしことなし。三章十六節、十八節、約翰第一書四章九節には、彼は神の生み給へる獨子と稱へらる。五章廿二節、廿九節、三十節、六章卅九節、四十節、四十四節、五十四節を見るに、稱は

凡子に委ねられ而して死し人は彼の聲を聞て墓より出で、義しき審判を受べし。一章三節には造られたるものみな彼によりて造られたりあり。二十章二十八節を見るに、トマスが彼に向ひ「我主よ、我神よ」と言ひしとき、キリストは此尊嚴なる名稱をも承認し給ひしこと明かなり。一章一節には明かに「道は即ち神なり」と記さる。而して同章十四節によれば「其道は即ち其後イエス、キリストとして知らるゝ有心者たること疑ふ可らず。

吾儕は今より共觀福音書に轉ぜん。此三書は其言辭も、其思想の體裁も、第四福音書及びパウロの書翰とは大に異なるものなり。馬太傳十一章二十七節に於て、キリストは彼自らと彼の教を受くる者どにあらざれば、神を知ること能はずと、主張給へり。此三福音書に悉く記載せらるゝ所の一の比喩に於て、キリストは自らをば從來神の僕として劣れる位を占めし所の者と異なりて、神の子と稱へ給へり。恰も希

伯來書三章六節の如し。殊に馬可傳十二章六節には「一人の愛子」と記さる。キリストは再三再四己れは天使等を従へて來らんとする審判者なりと曰ひ、以て自らの天使等よりも優るゝことを明にし給へり。例へば馬太傳十三章三十節、四十一節、十六章二十七節、廿五章三十一節、三十二節等の如し。黙示録に於ても同様の威嚴をキリストに歸せり。同書五章六節乃至十四節を見るに、彼は寶座のあたりに立てる羔にして、殺されしことあり、其血をもて諸族諸民の中より人々を贖ひて神に歸せしめたり。而して彼は天父と共に、天の萬軍によりて禮拜せられ、讚美せらるべきものなり。之を要するに、新約全書の種々なる記者等の殆んど凡ての者は、キリストは舊約の最大なる人々よりも遙かに近く神に接せること、恰も國王の子は最も位高く、最も高尙なる臣下よりも、非常に尊きが如しと主張

し、或はキリスト自らはかく主張し給へりと記せり。彼等みな救へて白く、大審判の日に至らば、最も善良なる人間も、神の前に罪人として立たざる可らざるに、キリストは神の位に坐して、萬人を鞠き給ふべしと天使等さへも彼の僕なり。聖パウロ及び聖ヨハネ云く「ナザレの大工は、最も古き天使長よりも以前に存在し、天使及び天地宇宙を創造りし者なり」と。而して神といふ言辭は決して他の者に用ひられざりしものなるに、聖ヨハネは之を彼に歸し、而して彼の之を承認し給ひしことを記せり。此の如き言辭を現在生存する人に用ひたることは、萬國の歴史と文學に於て無二無類のことなり。

新約全書の記者等は、勿論神の唯一なるを信ぜし者なるに如何にしてキリストに關し、此の如き觀念を抱くことを得しやは、綿密熱心に研究すべき事實なり。然れども今茲には之を論ずる能はず。唯左の如く言はし、充分ならん。彼記者等は神の子を以て、人間よりも天使よりも無窮優

り、無窮に神に近接せる者となし、も尙神の唯一なることを論定し、天父は神の子に對して、最高の位置を占むるものとなせり。即ち哥林多前書八章六節に「我儕に於ては唯一の神すなはち父あるのみ、...」及び「どりの主、即ちイエス、キリストあり」とあり。十五章廿八節に「萬物かれに従ふときは、子も亦みづから萬物を己に服はし、者に服ふべし、是神すべの物の上に至たらん爲なり」とあるが如し。又約翰傳十七章三節にも「永生とは唯獨の眞神なる爾と、其遣はし、イエス、キリストをしる是なり」とあり。雅各書二章十九節には「なんぢ神は唯一なり」と信ず。如此信ずるは善しとあり。人間の智識は實に朦朧したるものなるが故に、天父と神の子との關係に就て救ふる所の、新約全書の種々なる教訓の根柢に存する、深奥なる一致に達せんことは、組織神學に於て頗る困難なる事業なりとす。

新約全書中の、互に甚だ異なれる種々なる文書が、其言辭に於ても、其思

想の體裁に於ても、皆密接に一致せることは至極肝要なる一の歴史正  
 の事實なり。是等の文書の明かに證明する所によれば、凡て初代のキリ  
 ストの徒弟等、彼等の説は傳はりて今日吾儕にも達せりの中には、嘗て  
 キリストを殺せし人々の黨與たりし、ガマリエルの門弟もありしが、彼  
 等は皆深厚なる尊敬を以てキリストを仰ぎ見、彼を以て凡の人間より  
 も無類に優れる位置を占め、無類に神に近接せる者となせり。これは明確  
 なる事實にして、説明を要することなり。  
 之に對しては唯三個の説明あるのみ、(第一)初代のキリストの弟子等の  
 中には、其傳道せしにより、世人をしてキリストを尊崇するに至らしめ  
 し者もあるに、彼等は皆キリストの己に關する教訓を全く誤解したる  
 ものにして、彼等がキリストに歸したる要求の如きは、彼若し聞き給ふ  
 ことあらば、これは甚だしく神を潰すことなりとて、激しく拒絶し給ふべ  
 き程のものなりしか、或は(第二)全世界を救出し、宗教的大衝動の創造者

たるキリストは神の性質と己の神に對する關係とに就て自ら最も重  
 大なる誤謬をなせし者なるか、或は然らずして(第三)初代の弟子等がキ  
 リストに歸したる無類の威嚴は實際正當に彼の有するものなるや。  
 此三個の説明の中、孰れか一個は眞實たるべきものにして、吾儕の今最  
 もよく注意せざる可らざるものなり。

問題

- (一) キリストに關する聖パウロの觀念を記せ。
- (二) 新約全書に於てキリストに附せらるゝ神の子といふ名稱は如何  
 なる意味なるや。
- (三) 第四福音書に於ては如何なる名稱を用ひらるゝや。
- (四) キリストに關する新約全書の教訓に就て如何に説明し得べき途  
 あるや。

第十章

キリストの甦

以上吾儕が完全なる證據を發見して確なる事實と認めたることを再び記さんには、キリストは凡てその言辭を信する者に過去罪の赦と新しき生活をなすべき力とを與へんと曰へが、初代の弟子等は、此善き言辭を充分確信し之によりて良心の責を鎮め、安心立命を得たり、而して彼等の之を確信したる所以は、其キリストの言辭なりしが故なり、蓋彼が最大の人間よりも無窮に大なる者なりとは、彼等の一點の疑なくして、信仰せし所なればなり。

若し此最後の信仰にして正當なるならば、キリストの福音は、吾儕の切なる心靈的需要を充たしむべきこと、一目瞭然たり、蓋彼若し神の生を給へる獨子たり、且世界の大審判者たるならば、彼が罪を赦さんと

曰ひし言辭は、吾儕を罪に定むる言辭と同じく權威あるものなればなり、而して彼若し吾儕人間と天地宇宙との創造者たるならば、始めに吾儕に生命を與へし所の彼は、道德的自由を有する新生命を與ふるの力あることも明かなればなり。

吾儕は今問はん、ナザレのイエスは如何にしてかのガリラヤの弟子等のみならず、一時彼に敵對せし有力なるパウロの如き人物をして、かくも驚くべき深き信仰を其心に起さしめしや、イエスはパウロの爲し得べき凡の事よりも、又は彼が凡て人間の爲し得べきこと、信ぜし凡の事よりも、非常に大なる事業をなし、以てパウロをして彼の書翰の各葉に反射するが如く、深く己を尊崇しめしことあるや。

此答は直ちに得らるべし、聖パウロは幾度となく、明白に告げて云く、己のキリストを信するは、キリスト死より甦れりとの信仰に基づくものなりと、實に此信仰は、キリストに關する彼の思想の全軀を形造りしもの

のにして、凡て彼の希望の動かすべからざる基礎たり、且常に活氣を興ふる所の源泉たりし也。即ち羅馬書一章四節に曰く「甦りしことによりて明かに神の子たること顯はれたり」と。四章廿四節、廿五節に曰く「我儕も我主イエスを死より甦らし、神を信ぜば同く義とせらるゝ事を得べし」イエスは我儕が罪の爲に解され、又われらが義と爲られん爲に甦らされたりと。尙六章四節、七章四節、八章三十四節、十章九節、十四章九節を見よ。哥林多前書十五章四節に於て聖パウロはコリントの信者に對し、彼が嘗て、彼等に福音の大原理の一箇條として、キリストの甦を宣傳へしことを思出さしめ、其後甦りし主がその知れる人々に顯はれしことを記し、進で十四節乃至十九節に於て論じて云く、キリストも甦らざりしならば己の宣るところは徒然、また其讀者の信仰も徒然かるべく、己は神の爲に妄の證をする者となり、讀者は尙罪に居り、而して已に死し友人等はみな沈淪しならんと。凡て是等の言辭の證明する所に

よれば、キリストの甦は、パウロの説教中の一の大眼目にして、キリストは甦れりとの信仰は、彼自らと其讀者等とが福音を信ぜし信仰の基礎たりしなり。キリストは肉體を以て甦れり、と彼が謂ひしことは、三十五節、四十三節、四十四節に、キリスト再臨のとき信者が肉體を以て甦るべきことを教へしによりて明かなりとす。  
以上の言辭と全く一致せるものは、使徒行傳十三章三十一節、十七章卅一節、廿六章廿三節に記さるゝ、聖パウロの三の説教にして著しく且精密にキリストの甦に就て語れり。  
同一の信仰は四福音書にある甦の記事にも顯はれ、其各書とも、彼を葬りし墓の空虚なりし事を甦りし救主のことを記載せり。又使徒行傳中に傳へらるゝ聖ペテロの公會演説の中にも然り、且、又彼得前書一章三節には、讚べきかな神われらの主イエス、キリストの父かれ其大なる矜恤を以て我儕を再び生我儕をしてイエス、キリストの甦り給ひしこ

とに由て活る望を得させとあり、其二十一節には爾曹はキリストを離  
らせ且これに榮を予へ給ひし神をキリストに由て信ずる者なり、是故  
に爾曹の信仰と望は神に由りとあり。

かのガリラヤの使徒等及びパウロが有せしキリストに於ける信仰勇  
氣及び傳道上活潑なりしことは、彼等の主が肉躰を以て死より甦りし  
ことを信ぜしに原因せるものにして、凡の歴史上の事實にして、此事實  
よりもよく説明されたるものなかるべし。實に此信仰なくんば、福音も  
あるなく、基督教會もあらざるべし。

聖パウロ及び其他の使徒等が福音の與へんとする絶大なる約束をば、  
單に其キリストの言辭なるが故を以て、之を眞實と確認せしこと及び  
彼等がキリストを以て最高の威嚴ある者となし、之を深く尊崇せしこ  
とは、今之を幾分か説明せり、加之吾儕の説明は一步進みしものなり、即  
ち使徒等がキリストは人間の力によりて甦りしにあらざ、直接神の力

によりて死より甦りしことを信じたるが故に彼等がキリストを尊崇  
し、彼を確信せし所以も自ら明かになれり。死といふものは恐るべき力  
あるものにして、人其前に出づるときは、貴賤貧富の差別失せ、諸の力は  
悉く消失するものなるに、此死に打勝ち給ひし者は、實に最大なる人間  
よりも非常に大なる者なるべし。されば使徒等がキリストは神に對し  
て他の者の決して有せざる所の關係を保つ者にして、凡て死人を甦ら  
せ、且之を鞠くものなりと信仰せしは、實に當然のことなり。而して彼等  
が果してイエスは己を殺し、人々及び世界の人類に罪を赦し給ふ神  
の笑顏を見せしめんが爲に、墓より出で、甦りしことを信じたりしな  
らば、彼等の深厚なる尊崇は非常なる喜悅となり、熱心に神に事ふるに  
至りし事も、敢て怪むに足らざるべし。凡の人は此の如き信仰を有する  
能はざるかも知れず、又或人々は大使徒パウロ及びガリラヤの共働者  
等を見て、欺かれし者となし、狂信せる者といふもあらん。然れども使徒

等が最も熱心にイエスに事へし所以を説明するには、此信仰より外に考へらるべき途は決してあらざるべし。

されば茲に三個の無形の事實を得たり、これは無形なれども確かに歴史上の事實なり即ち第一使徒等がキリストの宣傳へたる罪の赦さるゝ事罪の束縛より解放せらるゝ事、及び永生を得る事の善き音信の眞理を確信せし事、第二彼等がイエスを尊崇て神の生み給へる獨子となせし事、第三彼等が彼の死より甦りし事を信ぜしこと是なり。此三個の信仰は孰れも無形の事實にして疑ふ可らざる歴史上の證據に基づけるものなり。其第一は第二によりて説明せられ第二は第三によりて説明せらるべし。故に第三は第一と第二とを説明すべき重大なる事實なれば今より説明せざる可らざるもの也。

キリストの甦と彼に人間以上の權威ありと主張する事とは、其存亡を共にせざる可らず。かの死して墓に葬られし肉躰が再び生命を得しこ

とを信ぜざる人々は、大概彼が人間以上の權威あることをも信ぜざるべし。キリストが人間以上の權威あることを信ぜざる人々は宜しく此言辭が自ら欺けるキリストの作爲しものなるか、或は欺かれたる彼の弟子等の作爲しものなるかを論究すべし。吾儕にとりては、最早此書の七十六頁に記したるが如き三個の假定説を有せず、唯二個の假定説あるのみ、第一キリストは眞に死より甦りし者にして、彼は實に新約全書の記者の云ふが如き人物なるや、第二或は然らずして、彼は甦りしに非ず従て一個の人間たるに過ぎざりしものなるや。

今暫く此二個の假定説を眞實なりとして、其各を順次に試験せん。

若しもキリストは萬有の創造者が人躰をとりて、此世に生存し、死し、而して死より甦りし者たりしならば、人間の歴史中の最も大なる多の事實は充分説明せらるべし。使徒等の信仰せし所以は、其信ぜし事の眞實なるによりて説明さるべく、聖パウロの改心せし所以は、彼が終に眞理



と認めし事の眞實なるによりて説明さるべし。若し斯の如くならば、吾儕はパウロの改心せしことに就て容易左の如く思考することを得べし。彼がキリスト教會を迫害せしうちにもイエスは甦りしことありとの證據は益々強く彼の心に浸入し來り、其己が敵對しつゝありし基督教徒と接するによりて日々其證據を強められ如何に無頓着にユダヤ教に忠勤するも、此證據によりて心中に生ずる信仰を撲滅すること能はず、終にダマスコに行かんとする途中甦りし主の彼に顯はれしにより、今迄心中に横はりし偏見利慾等の障礙物は悉く破壊せられ、而してイエスの足下に伏して己の罪を悔ゆるに至りしならん。

キリスト實に甦りたりしならば、福音が世界を感化せし所以も自ら明かなるべし。蓋キリスト若し死より甦りたりしならば、彼は自らの主張しが如き者なるべし。彼は無類の意味に於て神の子にして、世界の救主たり、未來に萬人の審判者たりと主張し給へり。彼若し此の如き者なら

ば、その此世に生れしは世界の歴史の中、最も高大なる出來事なるべく、其弟子等の宣傳へたる福音は、神の子が人間となりて爲さんとせし目的を成就せんが爲めに、無窮の力ある神の用ひ給へる器たるべし。さらばかくも全能の武器を有せる人々が、人間の力によりて亡ぼされざりしことは怪むに足らず、又彼等の勇敢なる言語が數千人をして確信せしめ、福音は其を亡ぼさんとせし迫害に堪へて生存し、教會は其を仆さんとせし敵に勝ちて生残り、終に基督教が世界の諸宗教の中にありて今日の如く最高の位置を占むるに至りし事も決して怪むに足らざるなり。

キリスト若し甦らざりしとすれば吾儕は止を得ず左の如く信ぜざる可らず、キリストが十字架の上にて苦の中より語りし最期の言辭は彼の死牀が墓に横はりて腐敗つゝありし間に、兼て此くなさんとの目的ありしや否やは明らかならぬとも彼の死せし町に住へる數千人の心

を以て彼は死に打勝ち天に昇れりと確信せしめたり、此確信は益廣まり、遂にエルサレムの住民にして、鋭敏なる觀察力と、公平なる判断力とを有し、イエスを殺せし人々に驚せし所の一壯年も之を確信するに至れり、而してイエスの最も親しかりし友も最も激しく彼に敵せし者も共に人間にして最も善良なりしイエスをば、天地の創造者世界の審判者と信ずるに至れり、加之此確信は非常に廣く蔓延し、人々をして人類に最も高尚なる利益を與へんとする、献身的の生活をなさしむる源泉となし、萬國に廣まり、今日まで進歩し來れり、而して何處にても此迷信の如きものをば、誤て真理と認めたる所には、必らず確固なる進歩あり、何處にても之を信ぜざる所には、必らず希望なき滯滞と零落あり、何となれば、イエスと基督教とが世界に及ぼせし結果は、全く彼は死より甦れりと信ずる人々の働によりて生じたるものにして、是等の人々若し彼の甦を信ぜざる時は、全く此の如き結果を生ぜしむること能はず

る者なれば也、故にキリスト若し甦らざりしならば、一の迷信が人生の進行を全く轉ぜしめ、而して全世界を救へりと云はざる可らず、歴史中の最も大なる危機に於て、迷信は智識よりも勝り、誤謬は真理よりも優れたりとなさざる可らず。

之を要するにキリストの甦を否む説は、如何なるものにて、皆基督教の歴史と世界の歴史とを出來得べからざる事實の集合物となさざるはなし。此の如き諸説は全く信ずべからざるものなるが故に吾儕は先に掲げし二個の假定説中の他の一を信ぜざる可らず。勿論キリストの甦を信ずる事に就ては反對論ありと雖もキリストの甦を否む説に對しても重大なる反對論あり、若し此甦を信ずる事に對し之を否む説に對する反對論よりも幾層重大なる反對論のあるにあらざれば吾儕が之を信ずるに於て少しも妨なかるべし。是に對し如何なる反對論あるかは、次に之を考究せん。

- (一) 聖パウロがキリストを尊崇めて人間以上の者となせしは彼の麤を信せしに基づくことを證せよ。
- (二) 最も早くよりキリストに従ひ最も彼と親しかりし弟子等も、その麤を信ぜし事を證せよ。
- (三) 彼等が主の麤を信ぜし事は全く彼を尊崇むるに至りし基なりしことを示せ。
- (四) キリストの實際麤りし事を否むときは、基督教の歴史は解すべからざるに至ることを説明せよ。



第十一章

反對論

以上の議論に對し、聖書の中には信ず可らざる事或は爲し得べからざる記事ありといふ事を以て反對するは正しからず、何となれば以上の議論は聖書の一般に眞實なる事を假定せしものにあらざればなり。吾儕が使徒及び傳道者等の文書を見る事、他の一般の古き文書を見ると異なることなく、彼等の文書に特別の權威を歸することなかりき。然も吾儕は此文書の中に最初のキリストの弟子等が死して墓に横はりし彼の身軀の再び生命を得しことを信ぜしが故に、彼を以て人間よりも無窮に大なる者となせしことを明かにすべき、完全なる證據を發明せり。其時の有様を考ふるに、誤謬の説の永く存することは決して爲し得べからざりしに、右の信仰のみ、獨り永く存し而して全世界を感化する

に至れり。之に由て考ふれば、使徒等の深き確信は迷信にあらず、眞理なりしこと疑ふ可らず。此議論は聖書中此他に信じ難き記事ありとて、決して傷けらるゝものにあらず。凡の記事は各別々に試験せられざる可らず。

或は又吾儕の議論は、聖の記事に就て四福音書の各に相違する所ありといふ事によりても、傷けらるゝものにあらず。何となれば吾儕の議論は、或る誤つ可らざる記事に基づきしにあらず。重にキリストの聖に關する、聖パウロの明白なる信仰に基づき、其時代の他の諸の證人の一致せる證明を以て確めたるものなれば也。四福音書の相違することは、使徒等の信仰にも、其信仰の彼等を感化せし事にも、又は彼等によりて全世界を感化せし事にも、影響を及ぼすものにあらず。此相違は人間の觀察力記憶證明等の、屢不精密なるを免れざるに由るものにして、容易に説明することを得べし。加之其時イエスの墓に於て、天使を見しのみ

にして、彼の在さるを認めし所の人々が、其心大に激動し、周章せし事により、右の説明は尙容易なるべし。而して四書の相違せることは、却て各の記事の獨立せることを證明し、其肝要なる點に就ては、凡の記事は悉く一致するものなり。  
能く注意せざる可らざる反對論は、唯一箇あるのみ。キリストは死より甦れりと證する者に對し、力ある反對論と認めらるゝものは、奇跡は有る可らざるもの也と云ふにあり。而して大膽に論定して云く、自然界の法則は不斷一様に働くものにして、凡の人間の科學も理學も又は一切の物質的進歩もみな此法則の一樣なる事を認め、之に基づくものなるに、死人が再び生命を得るは、此一樣なる働の以外にあるものなるが故に、決して出來得べからず、又思考ふるべからざる事なりと。  
此反對論中、宇宙の法則は不斷一様に働くもの也と云ふは、取りも直さず、今日吾儕の目に觸れざる事物は、世界開闢以來存せしことなきもの

也と云ふに異ならず。かく云ふは實に證據なき事なるのみならず、吾儕の目前に明瞭なる文字を以て記さるゝが如き、此地球の物質的歴史の反證するところなり。何となれば既に此書の第二章に論じたるが如く、自然界に關する凡の學術の證明する所によれば、何時か太古に於て、凡の物みな無機物たりし處に、突然か又は漸次にか、生命の始めて生じたることあるは明かなれば也。偕此の如く無機物より生命ある者に變遷ことは、今日迄の綿密なる研究に於ては、見得べからざることなり。且又幾分にも生命の起源に類似するが如き、働は少しも觀察らるゝことなし。無機物質と生活體とは、非常に懸隔せるものにして、想像に於てすら之を連結すること能はず。然れど何時か太古に於て、此二者の連続せしことあるは否むべからざる事實なれば、想像力を以て連結する能はざるものゝ實際に於て連結せられたるものなり。言を換て云は、今日存せざる所の一事實にして、昔時生じたることあり。而して其事實が今

日觀察らるゝ所の凡の事實と全く異なる事恰も死人の甦る事が、吾儕の周圍に見ゆる自然の進行と全く異なるが如きものある也。是即ち太古に於ける一の勢力の作用にして、其後吾儕の知る限りは、人間の記憶に存する時代に於て、決して以前と同様に働きしことなきものを謂ふなり。

キリストの甦は、自然界の法則の一樣なる作用を撞着すと云は、生命の起源も亦之と撞着すべし。此キリストの甦も、生命の起源も、決して従前より働きつゝある勢力を、一瞬間たりとも停止せしめしものにあらず。却て此兩實事は、自然界の諸勢力よりも、高大なる一の勢力の存するありて、従前自然界に觀察らるゝ諸の事實と全く異なる結果を生ぜしむることを明かにせしのみ。吾儕は左の如く信ぜざる可らず。幾千萬年の昔無機物質たる生命なき極微分子が自ら有機物質たる複雑たる分子となり、而して生命の官能を有する細胞となりしことある也。然れ

ども太古より存せし諸勢力例へば重力の如きものは、此際にも續て働  
 き、而して生命を生ぜしめし新しき勢力の作用の上にも、其力を及ぼし  
 くものにして決して決して自然界の進行を停止せしことなく、唯一の新しき  
 勢力の出現れしにより、此地球の歴史に於て、一の新紀元を作りしのみ  
 此新紀元は、從來存せし所の凡の紀元よりは非常に優れたるものにし  
 て、其從來存せし諸の紀元は、此新しき發達を生ぜしめし預備となるが  
 故に、此際實に大切なるものとなり、若し此新しき發達の生ぜざりしな  
 らば、從來存せしものは悉く無用のものたらざるを得ざりし也。  
 又之と同じく、ナザレのイエスの衷には、通常の人間の有する道徳的勢  
 力と全く異なる、一の道徳的勢力の働きつゝありしことは、人間の歴  
 史の證明するところ也。彼の此世にありし時には、社會は益はげしく零  
 落の方、に下降つゝあり、羅馬帝國の腐敗を極めしこと、其後の最も悪し  
 き時代の比にあらざりき。東方諸國に於ても、古昔の力なき文明は、殆ん

ど消失んとし、北方の諸國は、野蠻の風俗に圍まれて、錯雜を極めたり。如  
 何に思慮深き人々の目にも、當時希望の光線顯はるべしとは、思はれざ  
 りき。然るに人々の豫想外にも、目に見えざる大なる手は、此免かるべか  
 らざるが如くに見ゆる所の零落をば、秘かに制止し始めたり。衰微し墮  
 落しつゝある帝國の腐敗の中央に新しき生命の萌芽は顯れ出で、成  
 長始めたり。此生命を發達せしむるに適したる地質は、かの粗野なれど  
 も勇敢なる北方の民族なりき。而して爾後一千有餘年が間、此萌芽は絶  
 えず成長發達して、近世の歐米諸國の如き、高尙なる大木となり、其蔓延  
 れる枝葉の下に、徳義も、文明も、繁榮も、宿をなすに至れり。かくも洪大な  
 る結果を生ぜしむる所の新しき道徳的原動力は、世界の歴史に於ける  
 凡のものは、全く異なる顯象なり。此力は明かにナザレのイエスに  
 基けるものにして、彼の衷に働き、彼を通じて働く所の、此道徳的勢力は、  
 吾儕人類の歴史の中に働ける凡の道徳的勢力とは、全く其類を異にす

るもの也。

此新しき道德的勢力が直ちに物質世界の諸の勢力の作用に感化を及ぼすことあるは、敢て怪しむべきことにあらず。蓋し道德界と物質界とは、密接に關係せるものにして、一方を感化する所のものは又他方を感化すべければ也。故に吾儕人類の道德的の激しき腐敗を止めし所のイ  
 エスが其人性の肉體に於て、物質的腐敗をも止めしことは、決して怪しむべきことにあらず。即ち彼は、凡て人體を死しむる所の物質的腐敗を止め、死の手をして、其囚人を解放たざるを得ざらしめ、而して一度死し  
 エスは、生きて墓より出づるに至れり。此の如く爲し給ひしと雖も、か  
 の人間の死するときに、有機體を組織する所の甚だ複雑せる化合物をば、單純なる原素に歸せしむる所の、化學的勢力の作用は、決して停止せられしに非ず。唯イエスの聖體の裏には、吾儕の有する生命よりも、高太なる生命あり、此高太なる生命は、死よりも其力強く、爲めに凡の死人の

中に働く所の人體を腐敗せしむる勢力は、暫く檢束せられ、以て凡の人間にありては、肉體と靈魂との最後の離別たるべき所の死も、彼にありては、一時の睡眠たりしのみ。夫れ吾儕の既に證明せし如く、世界に於ては、物質界に顯はるゝ諸の勢力よりも、其他に高太なる勢力のあり得べき事を一度承認するときは、吾儕が通常の勢力と其類を同ふせざる所の顯象を見ることがあるも、決して怪むことあざざるべし。かの生命の源起と、基督教の起源とは、孰れも右に云ふが如き新しき顯象にして、兩者何れの場合に於ても、新顯象は世界の歴史に於ける、新紀元を起せしもの也。

尙一の反對論にして注意すべきものあり。論者云く、基督教の進歩の遲きこと、及び基督教國民と基督教會にも、多の缺點あることは、福音の神より出來りしことを反證するもの也。神若し人間をして基督教徒たらしめんと欲し給ふならば、彼は萬人の心の中より、一切の疑惑を除去し

むる所の證據を與へ、萬人の上に大感化力を施し、萬人をしてキリスト  
 を信ぜしめしならんと。夫れ此世に福音の存するに拘はらず、人類の多  
 の部分は、今尙基督教を信ぜざる事及び基督教徒の中にも、其言行に於  
 ては、全くキリストの精神より遠ざかりしものある事は、否む可らざる  
 事實なり。是等の事實は、或る人々にとりて、福音は全能者より來りしも  
 のにあらざるの確固たる證據の如く見ゆる也。  
 吾儕もし自らの智識淺きに拘はらず、神の全能力を有するならば、必ら  
 ず凡て他の者に對し、己が意志のままに行はんとするなるべし。然れど  
 もかくすることは、他の者にとりて、多分幸福ならざるべし。凡て智識に  
 於ても、道德的感化力に於ても、強て吾儕に加へらるゝことあるときは  
 人間は自由を失ひて、單に機械の如きものとなるべし。然るときは、人類  
 は其最も高尚なる特權を失ひ、人性の特別なる價值を失ふべし。夫れ撰  
 擇の力なく、從て善惡を辨別せざる所の、人類の存するよりも、寧ろ、今日

の如く、自由ある人類にして、其中益々多の者が自ら志を定めて正道を  
 撰む者あるは、遙かに良きこと也。神は此くも大なる損失を招くも、尙強  
 て其意志を人間に行はしめざる可らずと論ずるは、愚の至りなり。然ら  
 ば福音の進むこと遅くして、未だ全身に普及せざる事は、決して福音の  
 神より出でしにあらざるの證據となるものにあらざる也。  
 人間は實際自由なるものにして、其運命は自らの手中にある事は、人々  
 の自由心を有すること、此自由の束縛さるゝときは、其結果として、道  
 徳性の傷けらるゝ事によりて明かなり。人々の自由心は、實に力強き  
 ものにして、何處の人々も有するものなるが故に、決して妄念にあらず。  
 此の如く神若し人間をして自由ならしめんと欲し給ひしならば、彼が  
 恩恵を下し給ふにも、かく附與し給ひし所の自由を傷けず、人々をして、  
 其與へんとする恩恵を退くることを得せしむるは、少しも怪むべき  
 ことにあらず。若し此理を承認するとき、凡の事は明かなるべし。人間



は自由なるが故に、基督教の進歩は、かの人心を暗まし、人の善行を曲ぐる所の凡の勢力によりて妨げらる。然れども福音は其の源の神に存するが故に、悪人が其進歩を妨げんとて、其途上に横たへし所の凡の障物物を壓倒し、基督教を代表し之に加はれる人々の不完全なるより生ぜし所の無数の腐敗にも打勝ち而して今日に於ては従前よりも益々純潔に益々強大になりつゝある也。言を換て云は、キリストより出づる新しき生命の發達するや、既に従前より人間の道德性と社交性の中に働きつゝある種々なる勢力の影響を受くるものなるが故に、其進歩遅く、且つ或る一部分の人々によりて信ぜらるゝ也。

此の如く、従前より存する諸の勢力に妨げられ、爲めに其發達することの遅く、且つ幾分の不規則なるは、獨り基督教のみの特性にあらず、舊約時代に於ける心靈的生命の發達も、遅く且つ妨げられしことあり。然れど遂に其目的とする所に達して、キリストの福音の爲に、必要にして有力

なる豫備となれり。之よりも一層發達の遅きものは、最初の動植物の生命なり。此生命も、其以前より存する所の無機物的の諸勢力の影響を受け、且つ幾分か之によりて支配せられたり。其始めて生じたるるときより以後、久しき間は、其發達する事實に遅くして、將來必要なるものとなるべしとは、容易に思はれざりしならん。加之無機物質の粗暴なる諸勢力は、之を撲滅さんとせしが如し。然れども此生命は亡ぼさるゝことなく、益々成長發達して、驚くべき多の種類となり、遂に無限に美麗なる衣となりて、此地球を飾るに至れり。

此の如く、我地球の歴史に於ても、又は吾儕の知る所の天地宇宙の歴史に於ても、其大紀元はみな同様なる事實を有せり。即ち従前より存在せる諸の勢力の中間に、新しき生命は自らの有する新しき法則を以て、顯はれしこと再三あり。此新しき生命は、其新しき法則に遵ひ、且従前より存在せる諸の勢力の影響をも受けつゝ、發達して、遂に其周圍にある凡

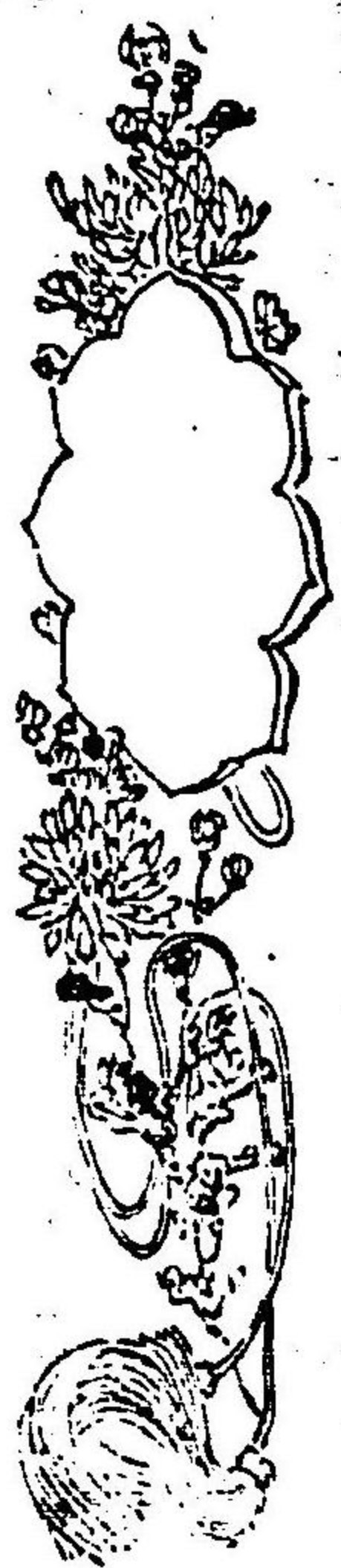
のものを變形せしめ、其高尚ならしむるに至れり。

既に此書の十章に於て論ぜし如く、凡てキリストの誕を否む所の説は、  
 基督教の歴史を以て爲し得べからざる事の集合物と見做すもの也。  
 キリストの誕の事實に對しても、反對論ありと雖も之を否む所の説に  
 尙重大なる反對論あり。若しもキリストの誕に對し之を否む説に對  
 せる反對論よりも幾層重大なる反對論のあるにあらざれば、吾儕は基  
 督教の歴史を全く虚妄と見做すが如き、失望的の説を信ぜざるべし。惟  
 其反對論の最も重大なるものは、自然界の統一せる事に基づけるもの  
 と福音の成功の不完全なるに依るものにして、吾儕は今之を檢査し  
 ため而して吾儕は外見上擡着せるが如く見ゆる所の者の根底に深遠  
 洪大なる調和の存することを認めたり。言を換て云はゞ、吾儕はキリス  
 トの誕に關し二途の中何れか一方を信ぜざるを得ざるに吾儕をして  
 其一方即ち迷信妄念は世界を救出したりと信ぜしめ而して基督教徒

の希望の基づく所の無数の證據を棄てざるを得ざらしむるが如きも  
 のは、一もあることなし。

問題

- (一) 聖書中の或る記事にして、外見上信ずべからざるが如きものある  
 を基礎として福音に反對する議論を辨駁せよ、又キリストの誕に  
 關する四福音書の記事に各相異なる所あるといふ異論を辨駁せ  
 よ。
- (二) 右の反對論よりも一層重大なる反對論を示せ。
- (三) キリストの誕は自然の勢力を停止せしにあらざることを示せ。
- (四) 恰もキリストの誕が自然界の普通の進行と異なるが如く、物質世  
 界の過去の歴史に於ける一事實にして、自然界普通の進行と異な  
 れるものを挙げよ。
- (五) 福音が神より出でしものならば萬人の拒む可らざる強き證據を



第十二章

結論

吾儕は今に至るまで、基督教の文書をば、今日吾儕の周圍にある事實に照らし、過去の歴史に照らし、且吾儕の内心に照らして、考究し、以て左の確かなる事實を認めたり。曰く、ナザレのイエスは、凡て其言辭を信ずる者に、過去の罪を赦し、新しき生活をなすの力を與へんと宣傳へたり。曰く、彼は此救を確めんが爲めに、己は最大なる人間よりも無窮に大なりと主張し給へり。曰く此要求の正當なるを證せんとして、彼は死より甦り給へりと。今より吾儕は此研究より出づる、論理上及び實際上の結果を掲ぐべし。

今歴史上の事實なりと證明せし所のキリストの甦りは此書の二章に於て、物質世界より推究せし所の議論を充分確むるもの也。即ち目に見ゆ

るもの裏面には、目に見えずと雖も智識ある所の萬物の創造者主治者存すること也。何となれば、キリストは威力を強めて天に在ます父に就て語り給ひしこと明かにして、吾儕は死より甦り給ひし者の教訓を疑ふこと能はざれば也。且又キリストの甦りしにより、目に見ゆる人間社會を支配する所の、自然の勢力よりも、非常に大なる勢力は著しく顯はれたり。此の如く、キリストの墓の空虚なりしは、吾儕をして神の玉座を仰ぎ見せしむる天門の開けたるが如し。

吾儕をして死して墓に横はりし、キリストの肉體が再び生命を得しことを信ぜしむる所の證據は、又彼の絶大なる要求の眞實なることをも明かにするもの也。是即ち彼が自らと、そが神に對する關係を成就して、主張し給ひしことにして、吾儕は明瞭なる證據によりて、此要求の實に彼の口より出でしことを認めたり。故に證明せられたる甦りの事實は、又彼が天父と最も親密なる關係を有ち、最も高尚なる受造物よりも無窮

に上にある所の神自らの獨子たり、宇宙の創造者萬人の審判者たる事を明かにせり。且キリストは、父と子と共に、神の聖靈なる第三の存心者の存する事を教へ給ひしことも證明し難からず。さらばキリストが死に打勝ち給ひし事によりて證明せらるゝ所のイエスの教訓は、吾儕に神に關する新しき觀念を與ふるもの也。此新しき觀念は、キリストの時代以前には少しも知られざりしものにして、唯其概略のみ徹かに舊約聖書に記されしのみ。加之今日に至るまで、キリストの信徒のみの特有する觀念なり。

此神に關する新しき觀念は、新約書の教訓の全體に貫徹するものなるが、其後造られし通常ニカヤ信條を稱せらるゝものゝ内に正しく顯はさる。此信條は紀元三百二十五年ニカヤに開かれたる第一大會議に於て、其多分は適用せられ、其後紀元三百八十一年コンスタンチノールに開かれし第二大會議に於て、増補せられ、而して監督教會の祈禮文中

に記さるゝものと殆んど同様のものとなされしものにして、當時は其  
 文面のみ公同教會の適用せしものなりしが、爾後凡の時代に於て、大  
 數の基督教徒は其文面のみならず、其教理をも悉く信認せり。特に注  
 すべき價值ある事實は此信條中に含まるゝ所の神とキリストとに關  
 する觀念が世人をしてキリストを信仰せしめ、地上に神の王國を廣  
 んが爲めに、最も力を盡したる、殆んど凡の人々をば獎勵せし所の深  
 確信たりしこと也。此信仰の廣く蔓延せし事と大なる結果を生せしこ  
 とは、基督教と殆んど其範圍を同ふせり。其然る所以は、かの神の生  
 給へる獨子なりと主張せしイエスの、甦りし事が、此信仰の眞實なるを  
 證明せしによりて、明白なるべし。

吾儕は此書の三章と四章とに於て、威嚴ある良心と、現世に於ける賞罰  
 の不完全なることより推究して、死後賞罰は萬人に與へらるべしと論じ  
 たり。此議論は凡の時代に於ける、凡の宗教家の是認せしものなりしが、

今や己は未來萬人の大審判者なりと主張せし所の、イエスの言辭によ  
 りて、全く確められたり。又聖パウロが使徒行傳十七章三十一節に記載  
 せらるゝ如く、アテンスに於て、左の如く述べしも、其當を得たるもの也。  
 曰く、神はすでに其立し所の人により、義を以て世を鞫くべき日を定め、  
 此事に就ては、彼を死より甦らせ、其證を衆の人に予たまへり。此  
 キリストの道德的教訓は、何人と雖も、最も鄭重に尊敬せざるはなし。此  
 教訓の勢力と結果とは、今や非常に増加せり。何となれば、此教訓は萬人  
 を裁判すべき者の權威を有するのみならず、吾儕を零落の中より救出  
 し、天國に列坐せしめんが爲めに己の榮光を捨て、人となり、十字架上  
 に残酷なる死を遂げし者の、愛心より出でたる教なれば也。道德は即ち  
 イエスに忠義なるの一事なり、イエスは即ち「生者をして、以後ものが爲  
 ならで己に代死て甦りし者のため、世を過さしめんとて衆の人に代  
 て死しもの也」哥林多後書五章十五節。今や充分證明せられたる、キリス

トの人間以上の威嚴ある事は、一の模範を呈するものにして、其榮光あること、從來嘗て見ざる所たり、其無類に卓絶せること、人間の能く達し得べからざるもの也。蓋吾儕が彼を見て學び得ることは、彼が人性をとりしにより、又恥かしき死を甘んじて受け給ひしによりて、全く己を棄てしこと也。此最上の模範を以て凡ての獻身的の働に比較るときは、何れも皆其光を失ふに至るへし。

上に記したる所の、キリストは死より甦れりとの證據は、彼の宣傳へたる救拯に關する善き音信を信する、聰明なる、信仰の確固たる基礎なり。吾儕は自ら罪あることを覺り、神は罪に對して怒り給ふことを感ずるが故に、以上純粹なる歴史上の證據によりて追跡し、以て甦りし救主の言辭なりと認めし所の、罪の赦の約束を、信認せんと欲す。吾儕は又新しき生活を爲し得べき力を與へんとの約束をも信認すべし。何となれば、彼を死より甦らしめし所の力は、吾儕を起して、罪の束縛を脱せしむる

ことを得れば也。言を換て云は、吾儕の發見せし所の證據は、皆吾儕の心靈上の大切なる需要を充たしむ。蓋其證據は、キリストは救拯に關して自らの爲し給ひし約束を、成就するの力あり、且必らず成就し給へしと證明すれば也。

此證據は完全なりと雖も、未だ全きものにあらず、又は最も力ある終局の證據にもあらず。社會の種々なる位置にある所の、無數の男女は、福音を信じたりしが、彼等は其信仰の程度に應じ、從來彼等を束縛し、墮落せしめし所の罪惡をば撲滅す力を受け、又内心も外部の行狀も全く新にせられて、自重の精神を益強くするに至れり。凡て是等の事は、彼等直接の經驗によりて知らるゝ所にして、彼等は天上より一の手の自らに達し、實際自らを高擧むる者あるを日々自覺せり。此證據は彼等の疑ふこと能はざるもの也。過にし日にありては、彼等の心中にある裁判官は、彼等を罪に定め、決して免れしむるの道あらずしが、今や此同一の誤謬

に陥ることなき裁判官は、彼等の信認せし所の救拯の眞實なることを證明せり、而して彼等は其裁判官の證明に抵抗すること能はず。此の如く、人々が深き罪の中にありしとき、福音の眞理を信じたるは、全く福音は死より甦りし者の言辭たるの一事に基づきしものなるが、彼等基督教徒の心靈上の經驗も福音の眞實なるを證明せり。

之を要するに、吾儕が福音の眞實なるを信ずる所以は、直接の觀察によりて知らるゝ所の、無数の事實を説明せんには、福音を眞實となすより外に少しも説明の途なければ也。其無数の事實は、即ち物質世界にあり、吾儕の良心にあり、吾儕の周圍にある人間社會にあり、且、キリストの時代より今日に至るまで傳はりし所の、多く文書の中にあるものにして、此外、吾儕の周圍にある社會と吾儕の内心の經驗とを觀察して生ずる所の、多の事實は、日々増加し行くなり。かく増加し行く所の證據は、キリストの福音の眞實なるを信ずる、吾儕の確信を増加するものなり。

茲に能く注意すべきことあり、即ち今充分に證明せられたる福音は、凡て之を信ずる者に、自らの救はれたることを明かに確知せしめ、且、死後の生命に關して、確かなる希望を抱かしむることなり。蓋キリストが神は凡て救拯に關する善き音信を信ずる者を嘉すべしと曰しは、此音信を信ずる所の吾儕を、今直ちに嘉し、而して吾儕の衷に新らしき生命を生ぜしむるの原動力として、其聖靈を與へんと曰しなり。言を換て云は、福音の約束は一般に通ぜるものなれども、信ずる所の人々には、實際彼等を救出す所の實際の約束たる也。吾儕は此約束を基として安心す。吾儕の確信の始めて起りしは、内心の經驗に基づきしにあらざ、又は自ら善を爲せしと自覺せしにあらざ、實に吾儕が純粹なる歴史的方法を以て追跡し、以てキリストの口より出でたりと認めし所の、教理と約束とに基づきし也。吾儕はそのキリストに關しては、死より甦りしこと、從て人々の最も能く確信すべき價値あること、の確實なる證據を發見

せり此の如くして生じたる所の吾儕の信仰は其後明白にして疑ふ可らざる所の心中の経験によりて其眞實なることを確めらる。心中の経験とは即ち吾儕の衷にある最も高尚にして最も善良なる心靈の自由にせらるゝ事と其發達すること也。此の如く福音は眞實なりとの吾儕の信仰も吾儕がキリストに依頼むことも吾儕が永生を希望することも皆同一の確固不拔なる基礎に基づけり。

今や神學と宗教とが同じ基礎を有し同じ目的を有すること明かなり。神學は宗教の學問なり蓋目に見えざるものにして人間を正義する所のものに就て吾儕の知る所のものを悉く敘述たるものは神學なれば也。宗教は神學を道德的及び實際的に適用したるもの也。何となれば宗教は人間を正義する所の目に見えざるものに関せる觀念なれば也。

問題

(一)キリストの誕は智識ある世界の創造者、主治者の存することの證據

據を確むることありや、又死後の生命あることとの證據を確むるや。

(二)誕の事實はキリストの人間以上の威嚴あること、及び彼の宣傳し

福音の眞實なることを證明するや。

(三)キリストの神性なることは教會の歴史の中に之を確むるものありや。

(四)キリストの道德的教訓は彼の誕の證據によりて、一層確めらるゝことありや。

(五)誕の證據は吾儕自らの救拯を確むることありや。





聖書の權威

以上の議論をなせしときは、聖書中の何れの書物にも、誤謬なき事、或は特別の權威ある事を、假定せず、又は之を證明せんとせず、唯新約全書の諸書をば、通常の古の書物と等しく、之を用ひたり、吾儕は、其中或る書翰が、今日吾儕の所有するものと、實際同じ形にて、使徒パウロの記し、ものなることの、確實なる證據を、發見せり、故に聖書中此他の書物の眞偽如何に拘はらず、右の書翰のみは、最初の基督敎々師中、最も著しかりし者の精神と思想とを、明かに示すもの也、又吾儕の既に論ぜし如く、是等の書翰は、聖パウロの了解せし、キリストの敎訓を、充分明かに記し、彼がキリストを以て、無類の意味に於て、神自らの子なりと信じ、且死して墓に横はりし、キリストの肉體は、再び生命を得たりと信ぜしことを、證

明して、一點の疑を遺さず、且又新約全書の此他の諸文書は、其書されし時日、其有する權威等の如何なるに拘はらず、其書の主意悉く一致するが故に、初代のキリストの弟子等が、みな福音とキリストとに關して、聖パウロと同様の信仰を有せしことを、充分確かに證明せり、此信仰は、其時の事情と、其世界に感化を及ぼせし事とに照らして考ふるときは、キリストが實際死より甦りしにあらざれば、決して説明すべからざるもの也。

吾儕の議論は、多の種々なる證據人に基するものなるが故に、縱令聖書中の或る記事が、相互に矛盾すること、又は信ずるに足るべき其時代の歴史に撞着し、近世科學の確實なる結論に反對するとの證明せらるゝことありとするも、吾儕の議論は、少しも傷けらるゝことなし、何となれば、誤謬なるものは、何時にても、容易に發見さるゝものなれども、吾儕の掲げし多の證據人の一致することは、其一致する所の事實の眞實なる

にあらざれば、決して説明せらるゝこと能はざれば也。  
 言を換て云はし、吾儕がキリストを充分信仰し彼の宣傳へたる救拯を  
 得るために要する所のものは、皆な悉く新約全書中にあるなり。  
 且又新約の諸書は、上に説明せし議論の缺く可らざるものにして、若し  
 も此書の傳はることなかりせば、吾儕はキリストの宣傳へたる善き音  
 信に就ても、彼の主張せし人間以上の權威あることに就ても、信ずべき  
 記事を知ること能はず、又彼が死より甦りし事に就ても、充分なる證據  
 を得られざるべし。蓋此の如き證據は、キリストの直接の弟子等の信仰  
 を示すべき、其時代の文書の中にあらざれば、力あるものにあらざれば  
 也。若しもパウロの書翰、四福音書、使徒行傳等の記さるゝことなかりし  
 ならば、キリストに關して確固たる智識は得難かるべく、彼に就て、確實  
 聰明なる信仰は生ぜざるべし。此の如き信仰なくんば、基督教徒の生命  
 も希望も存せざるべし。さらば吾儕現在の信仰と希望と愛とは、全く基

基督教の文書に基づけるもの也。  
 夫れ神は、幾千萬年の昔よりして、將來必要なるべきものを悉く先見し  
 つゝ、墮落せる人間を救はんとの目的を立て給へり。其目的の熱心なり  
 しことは、之を成就せんとする手段方法の價貴きことによりて明かな  
 り。此れも熱心なる目的を有し給ひしが故に、其目的の中には之を成就  
 するに必要なる凡のものを含まざる可らず。さらば基督教文書を作ら  
 んことも、其永遠の目的の中に存せしなるべし。前に論ぜし如く、此文書  
 なくんば、キリストは全世界の光となり、生命となり、能はざりし也。  
 此事に關せる一切の事實を充分説明し得る途は、左の一箇あるのみ。殊  
 に基督教文書は完全にして、信ずるに足るべきとは、已に證明したりし  
 が、其然る所以を充分説明すにも、亦左の途に由らざる可らず。曰く、萬世  
 萬民の爲に設け給へる福音を宣傳へしめんが爲に、己の子を世に遣は  
 し給ひし神は、其有し給へる大目的を充分に且精密に有せる所の福音

の記録と解釋書とを、後世の爲めに保存せしめ給へりと。此の如き肝要なる意味に於てのみ、此記録は己の子を與へて、人間の爲に死しめ給ひし所の神の賜物にして、必要なる事物は、充分之を記すも、不要なることは、少しも之を掲げざるものなり。

基督敎の記録と、救拯に關する神の目的との關係に就ては、新約全書の記者中にて最も力ありし者の一人も亦右の説明と同様に精密に論定せしことあり。約翰傳二十章卅節、三十一節に曰く、此書に録さるる外、なほ許多の奇跡をイエス弟子の前にて行り、此書を録せるは、爾書をして、イエスの神の子、キリストなる事を信ぜしめ、之を信じ、其名に因て生命を得させんが爲なりと。此目的の成就せしことは、本書の議論によりて、吾儕の目前にも、心中にも、明白となれり。蓋吾儕は此古き文書を讀で、キリストが神の永遠の子なることの完全なる證據を發見し、キリストに於て死の力も尙亡ぼすこと能はざる所の生命を發見し、而して今之を

有することを得れば也。

右の引用文中に記さるる、目的は、人間たる記者の有せし者なるか、將た、人間よりも大なる存在者の有せる者なるかは、論ずるの必要なかるべし。何となれば、既に證明せし如く、人間の記し、此記録は、神の目的の成就せし者なればなり。引用文中に、此書を録せるは云々、原文には此書の録さるるはとありとありて、余の此書を録すは云々とあらざるによりて考ふれば、其記者が人間以上の教導者あるを自覺せしと明かなり。此記録は人間の手によりて記されしものにして、これ亦神の目的の然らしむる所なり。故に其記者等が、通常善人の有する心に勵まされて筆をとりし如き形跡あるは、決して怪むに足らず。即ち路加傳一章一節乃至四節にあるが如し、我儕の中に篤く信ぜられたる事を始より親く見て道に役たる者の、我儕に傳へし如く、記載んど多の人々、これを手に執る故に、貴きテヨヒロよ我も原より諸の事を詳細に考究たれば、次第を

爲て爾に書おくり、爾が教られし所の確實を曉せんと欲り、之によりて見れば、此書の記者は、他人の企あるに由り、自らの精密なる見聞に基て、記さんと欲せしなり。彼は人間以上の教導者ありしを自覺せざりしならん。然れども、獨り此記者のみが記す所の多の記事中より、豊かなる心、靈上の滋養を獲る所の人々は、必らず其書中に神の手のありしことを覺るべし。

以上第三福音書と、第四福音書とより引用せし事實は、新約全書の多の部分に於ても同様なり。蓋聖パウロの書翰にある所の證據は、第四福音書にあるものよりも一層貴重なるのみならず、其證據の眞實なる事は、四福音書、使徒行傳等の種々なる書物の一致せる證據にして、充分確めらるれば也。凡て是等の書は、其記載する所の、キリストの教訓と威嚴とに關する證據の多寡に應じて、或は充分に、或は幾分か、神の救拯の目的の中に含まれし者と認めざる可らず。

聖パウロの書翰の多のものは、其當時に起りし特別の必要に應じて記されたるものなれども、其今日も尙吾儕にとりて無限の價値あることを考ふれば、神の手は其中にありて、萬世に於ける彼の僕等を絶えず教導し、保護し給ふこと明かなり。吾儕の既に記し、如く、又容易に證明せらるゝ如く、基督教の文書は、人間の手を経て、通常の方法により今日迄傳はりしものなれども、吾儕の今有するものは、記者の手に成りしものと、實際同一なり。此の如く無害に保存せらるゝことなく、且此く無害に保存せられし事の充分なる證據あるにあらざれば、基督教信仰の基礎は非常に不完全なるべし。故に吾儕の心靈的財産の證券の書されしこと、その保存せられしこと、は教會の首長の懇切なる注意に原づくものとなさざる可らず。約翰傳二十章卅一節に記さるゝ目的を見るに、基督教文書はキリストの教訓を精密に描出せしものにあらず、事實を眞正に記載せしもの也。

吾儕がキリストの約束を信ずるは、或る歴史上の事實を信ずるに異ならず。故に確固たる信仰を有んには、眞實なる歴史的記録を有せざる可らず。

聖書中の諸書が通常歴史的眞實なることを試験せんには、一般の古き文書の眞偽を査ぶる所の歴史研究方法によらざる可らず。然れども此の如き細密なる検査は、此書に於て全く爲し得べからず。されど以上述べ來りし所の議論は、純粹なる歴史的の方法によりて、聖書中の最も肝要なる記事の眞實なるを證明せり。即ち死して墓に葬れし、イエスの肉體が活きて、強くなりしこと也。聖書中の此他の記事は、其中にキリストの人間以上且つ自然以上の力あることを記すが故に信ぜられずと云ふ者あれど、此誕の證據あるにより、此他の記事も亦疑ふ可らざる也。各の記事は、其自らが有する所の事實の眞偽によりて判断せざる可らず、通常キリストの行し給へる小奇跡、彼の生涯中の多の細事、及び教會建

設の記事中の細事に就ては、吾儕をして彼の死より甦りしことをも信ぜざるを得ざらしむるが如き、多の證據あることなし。然れども此最も大なる事實の證據あるが故に、理論上出來得べからざるが如く見ゆる所の、ラザロの甦の如き一切の記事も、疑ふ可らざるに至る。自然界の中に之を確むる所の相類似せる事實あり、即ち神の超自然的の力は、其最も著大なる顯現を爲す以前に、大抵微小なる顯現をなすことある是なり。何れの場合も、皆神が吾儕の必要に應じて、與へ給ふなり。キリストの甦の如きは、吾儕の永生の希望の基礎にして、此大事實に就ては、完全なる證據あるあり。ラザロの甦には、教訓を含むこと少なからず。雖も、前者と等しく肝要なるものにあらず。從て之を證する所の證據も、前者と等しく明瞭堅固ならず。

パウロの書翰中に時々引照せらるゝ所の、あまり必要ならざる事實に就ては、余は自らの著はせる是等の書翰の註釋書に於て、之を試験せり。

余は此試験の結果として、是等の引照の非常に精密なる事と、使徒行傳の歴史上眞實の書なる事とを、確信するに至れり。余は又新約全書全巻の神學的教訓に貫徹せる完全にして、深遠なる調和を明かにせり。此調和あるに、よりて考ふれば、基督教聖書の中に、キリストの實際の教訓を精密に記載しあること、決して疑ふ可らず。

之を要するに、吾儕は新約全書を以て、キリストの生涯、教訓、死、甦等の記録にして、人間の一切の心靈上の需要を充すに充分濶大にして、且精密なるものと認むることを得べし。

之と同様に、舊約の諸書も、神がイスラエル人に對して立て給へる契約の基づきし所の、大事實の完全なる歴史上の證據を有せり。此大事實のうち、摩西五書にある記事の如きは、各事實實に眞正なることを示すべき證據を有せり。預言の諸書と詩篇の中には、出埃及記に記さるゝ、神がイスラエル人に行し給ひし、大なる救拯を引用せること甚だ多し。之に

よりて見れば、イスラエル人の心靈上の思想と生命とは、大抵此救拯によりて充たされたり。且又彼等が舊約全書の殆んど各業に輝く所の一の活ける神を知り、之と交り、之を確信せし事によりて考ふれば、神が他の國民と異なりて、獨りイスラエル國民にのみ、自らを特別に知らしめしこと、明かなり。實に舊約全書中の文書的事實を説明せんには、唯左の一途あるのみ。即ち神は眞實に自らをアブラハムに顯はし、又モーセを通じて、其子孫に顯はし、而して其子孫には、一定の道德的教訓と、禮拜の儀式等を與へ、以て彼等をして神に對して特別に恵まれたる位置を有たしめたるなりと。

是等の事實は舊約全書によりて、今日まで保存せられ、完全なる歴史的證據によりて、證明せられたるものにして、今吾儕がキリストの福音を明かに理解せん爲に、非常に補助となるもの也。是等の事實は、福音の日の晨にして、基督教會史中の何れの時代に於ても、古昔の神の民の話イ

スラエル人の神聖なる歌、預言者等の榮光ある幻像等は、キリストの僕に非常なる快樂と利益とを與へたり。此利益の洪大なるによりて考ふれば、舊約全書の編製られ、保存せられたることも、吾儕の主イエス、キリストの父なる神の手によれること、明かなり。

此く推量せし議論は、舊約書の權威に關し、新約全書に教ふる所のものによりて、大に確めらる。今少しく之を考究せん。

聖バウロは、一點の疑なく、常に舊約全書の記事を以て、歴史上の事實と認めたり。羅馬書五章十二節乃至十四節に於て、人類墜落の話を以て議論をなし、以て此話を信ぜし事を明らかにせり。同書四章一節乃至廿二節と九章七節乃至九節に於ては、アブラハムの話と眞實と認めし事を顯はし、同書四章三節と加拉太書三章六節に於ては、創世記十五章六節に記さるゝアブラハムと神との心中に起りしことを信認し、以て肝要なる議論の基礎となせり。羅馬書九章十節、十五節、十七節に於ては、

ヘカの子、シナイに於けるモーセ、バロを引照せり。哥林多前書十章一節乃至十節に於ては、舊約に記さるるイスラエル人の荒野に於ける話の中の種々なる出來事を引用し、十一節に於て、是等の事は眞實に起りし事實にして、吾儕を警むる爲に、録さるといへり。又舊約書中に明かに神の言辭と稱せらるゝものは、聖バウロ屢之を引用して神の權威ある聲となせり。羅馬書四章十七節、十八節、七章七節、九章七節、九節、十二節、十三節、十五節、二十五節、三十三節等の如し。

又聖バウロは、舊約全書を以て、信ぜべき事實を記せるものとなし、其中に神の言辭と稱せらるゝものをば、實際神の語りしものと認めしのみならず、舊約書の記者等の通常の言辭をも神の法律と認めたり。即ち著しき例は羅馬書三章十節乃至十九節にして、使徒バウロは詩篇と以て賽亞書とより引照せし後之に加へて曰く、それ律法の言どころは其下に

に罪ある者と定らん爲なりと。此の如く彼は、其引照せし所の書物と、凡て之と位を同ふするものとをば、一切の普通の書物と異なりて、人類に關する神の意志の公然發表せしものとなせり。恰も國家の成文律は、其他の文書と異なるが如し。加拉太書三章十六節に於ては、希伯來語に於ける最も小き一字が神の約束の中に欠けたることを基として議論となせり。爾の裔といふ言辭は複數にあらざして、單數なるをいふ。此小文字の欠けたる言辭(即ち單數の文字)は數十度用ひられ、然かも複數の文字の用ひられ得る所に、單數文字を常に用ひらるゝは、アブラハムに對せる神の約束中の特徴なり。故にパウロの議論は一小文字の欠けたることのみを論據とせしにあらざ、此文字が屢同様に欠くる事に重を置きし也。聖パウロは羅馬書一章二節に云く、預言者等の口によりて爲されたる神の其子に關する約束は、聖書の中にありと。此の如く彼は聖書を以て、凡て他の書物と區別せり。恰も安息日、暮屋、神の名等の如き舊約

の聖き物が普通の事物と區別せられ、神に對し、特別嚴肅なる關係を有するが如し。

聖パウロ屢教へて云く、舊約の諸書は、後の世の基督教徒の利益となるために記されたるもの也。即ち羅馬書四章廿三節、廿四節に曰く、それ信仰に由て義とせられたりと録されしは、特かれの爲のみならず、亦かれらの爲に録されし也。我憐もし我主イエスを死より甦らし、神を信ぜば、同く義とせらるゝ事を得べしと。又羅馬書十五章四節に曰く、従前より録されたる所は皆われらに訓て、……爲に録せる也と。言を換て云は、聖パウロは舊約全書の作られし目的をば、約翰傳二十章三十一節に第四福音書に就て記さるゝものと、實際同様になせり。

聖パウロは提摩太後書三章十六節、十七節に於て聖書に就て記して曰く、聖書はみな神の默示にして、教誨と督責また……益あり、これ神の人の完全を得て諸の善事を行ふに缺なからん爲なりと。此言辭の中に



は猶太人の聖經は、聖靈の特別の感動によりて記されしこと顯はる。凡て是等のもの、證明する所によれば、聖パウロの説に於ては、舊約全書は實際の事實を正しく記載せるものにして、神の聲、神の法律として、全世界の文書中無類の位置を占むるもの也。

舊約全書は、新約全書中にも、此の如き位置を占む。希伯來書三章七章乃至十一節に於て、詩篇九十五篇七節乃至十一節を引用せるとき、其始に「聖靈の云る如くと記さる。又希伯來書十章十五節には、耶刺米亞書卅一章卅三節を引照せるとき、聖靈また之を證すとあり。キリストは四福音書に於て、屢舊約全書を引用し、之を以て、宗教的思想と行爲とに關して終局の權威あるものとなし給へり。約翰傳十章三十四節と十五章廿五節とには、詩篇八十二篇六節と、三十五篇十九節とを引用して、イスクエルの法律となせり。其前者の如きは、聖書は毀る可らずといふ洪大なる論定を以て確めらる。

此の如き引用文は、其數多くして、一々數ふ可らず。之即ち吾儕をして使徒等と新約記者等が、舊約全書を以て、凡の書物に勝り、神の意志の表はれたる權威あるものと認めしことを、信ぜしむるもの也。

此く新約全書の種々なる記者等が、皆一致して舊約全書を敬ひ、又最も古き基督教記録に記さるゝ如く、キリストも之を尊び給ひしによりて考ふれば、舊約全書は、神が實際人間に與へ給ひし默示を記載せる權威あるものたること明かなり。何となれば、化身せる神の子の撰み給ひし人々が自らの常に全き確信を以て引用する所の書物の權威に關して重大なる誤謬をなせしとするは、實に信じ難きことなれば也。而して舊約の記録に屬する所の權威は、皆悉く、新約の記録に屬し、其權威の度少くとも同等なり。新約は即ちキリストの死によりて確定せられたるものにして、舊約よりも勝れるもの也。

此議論を全く確むる所の事實あり。即ち此書に於て研究せし如く、キリ

ストの福音の眞實なることは、拒む可らざる歴史上の證據によりて證明せられ、其歴史上の證據の中に、猶太教と基督教との聖書が確かなる位置を占むること也。

吾儕は此安全なる基礎の上に立つ者なるが故に、聖書中の無数の細事に關する疑問の如きは、特別に之を穿鑿する人々に任すべし。此の如き疑問の中には、吾儕が今日有する所の摩西五書、以賽亞書の後半、撒加利亞書等の記者及び其記されし時日、又はペテロ後書の記者に關するものあり。されど古昔の説は近世の學者によりて疑はるゝの故を以て、其説は之によりて辯破せられたりと想像するは大に誤まれり。此の如き誤まれる想像は、斷じて之を避けざる可らず。此書の議論は吾儕の信仰に對し、確固たる歴史上の基礎を與へ、吾儕は安全に之を基ひとし、聖書に關する無数の細事の如きは、他人の研究に任すことを得べし。新約全書の中にすら、幾分か不精密らしく見ゆる所の記事なしと云ふ

可らず。例へば馬可傳一章二節には、馬拉基三章一節と以賽亞四十三章三節とを連結しながら、以賽亞の預言より引用せりと記され、又馬太傳九章十八節には、ヤイロは其娘既に死せりと云ふも、馬可傳五章廿三節、三十五節にありては、彼は其娘死んとすといひ、而して其後彼の女の死せるを聞けり。又馬可傳十四章十二節にある、吾儕の主が最後の晩餐を食じ給ひし夕の記事は、約翰傳十八章廿八節、十九章三十一節と矛盾するが如し、一層困難なるは、馬太傳十六章廿八節に記さるゝ、吾儕の主の言辭と、又彼の再臨の近きにある事に關して、十章廿三節に於てあまり必要ならざる引照の記さるゝことどもなり。

聖書の一般に精確なることは、證明せられしところなるが故に、細事に於てすら、粗忽より出でし誤謬ありとなす可らず。又右に掲げし如き相違ある事は、上に説明せし記者に關する議論の如く、人間の心靈上及び實際上の生涯に少しも影響を及ぼすものにあらざ、故に神が此書を人

間に賜ひし目的を達するときは、キリストの言行の記録たる新約全書の  
 価値も減することなし。吾儕がキリストを信じ、天を望む所の、大事實は  
 少しも疑ふこと能はざるものなり。  
 舊約書中の細事にして、あまり必要ならざる場合に、新約書中に参照せ  
 らるゝものを基として、舊約書の記事の是非を判定せんとするは實に  
 好ましからざることも也。例へば聖パウロは加拉太書三章十七節に於て  
 法律はアブラハムに與へられし約束よりも、四百三十年後に與へられ  
 たりと云へり。彼は出埃及記十二章四十節、四十一節を参照せしこと明  
 かなり。然れど此出埃及記に於ては、四百三十年は、埃及に止まりし時日  
 にして、アブラハムの契約と法律の與へられし時との間を指すに非ず  
 パウロの議論は年月の長短に關係すること少し。彼の時代に於ては、出  
 埃及記十二章四十節、四十一節の解釋は、少しく論ぜられたり。而してパ  
 ウロが其議論の中に、年數の短き方をとりしも、眞理を誤まりしにあら

ず。……  
 馬可傳一章二節にある相違の點は未だ解釋せられざるが故に、約翰傳  
 十二章卅八節、羅馬書十章廿節等の言辭を基として、以賽亞書後部の記  
 者の誰たるを論定することも正しからず。吾儕の主がイザヤといふ名  
 を出して引用し給ひしときには、決してかの論難せらるゝ所の章の中  
 より引用し給ひしことなし。これ注意すべきことなり。例へば馬太傳廿  
 一章十三節、馬可傳十一章十七節、十九章四十六節に於て、キリストは以  
 賽亞書五十六章七節を引用し給ひたれど、其名を出さず、又約翰傳六章  
 四十五節に於て、以賽亞書五十四章十三節を引用して、預言者の書に：  
 ……記されたりと云へり。而して馬可傳十章六節、七節と馬太傳十九章  
 五節に於て、創世記一章廿七節、二章廿四節を引用し給ひたれど、モーセ  
 によりて記されしものとして、之を引用せしに非ず。此の如くして引用  
 せしものは、新約書中に少しもなし。

聖書中の或記事が、自然科学の教と撞着するが如く云はるゝも、重大なる困難は少しもあらず、創世記一章に記さるゝ世界の起源に関する真理は、萬世萬人にとりて、至極肝要なるものにて、吾儕は之により、宇宙と人間とは、智識ある第一原因によりて、造られ、主治らるゝことを學ぶ、其次の數章により、世界の創造者が、アブラハムの神となり、イスラエルの聖者となり給ひしことを知る。かの地質學の達し得たる結果の如きは、右の如き至極肝要なる真理に比較するときは、全く無きが如き者となるべし。地質學に關する事實の如きものに就ては、吾儕人類は普通人間の研究によりて發見することある迄待つことを得べし。然れど人間の必らず心得ざる可らざることは、吾儕は無智無覺なる勢力に支配せらるゝものにあらず、正義愛ある神の手の中にあることこれなり。

舊約書にある少許の言辭の少しく不道德なるもの例へば、詩篇六十九篇二十二節乃至廿八節、百三十七篇九節、及び士師記五章廿四節乃至廿

七節に「ヤエルの奸謀を頌めたるが如きも、甚だ困難なるものにあらず。新約全書に於ては、最も高尚なる道德より外には、あるものなし。而してキリストの道德的教訓中の、最も高尚なる句の或るものは、摩西五書より引用せしもの也。預備契約(即ち舊約を云ふ)の記録は神の口より出でしものを記すのみならず、イスラエル人の不充分に理解し、適用せしものを載するが故に、其書の中には、高尚なるキリストの教訓より劣るものあるは、決して怪むに足らざる也。(舊約に於て、アブラハム、ダビデ等の如き、最も善き人々にても、其有する所の道德的理想は、今日キリストと新約記者等の言行によりて照らさるゝ所の吾人の有する理想に比較するときは、幾分か成熟せざるものゝ如し。舊約全書は實際の事實を記載するものなれば、善人の爲せし少許の悪行をも宥恕することなし。聖書は實に教會歴史の如く、道德的理想の進歩を記載せるものなるが故に、善人の爲せし悪行を漏さず記すことは、其書の正確なることを證

するなり。舊約書にして若しも歴史にあらざりせば、此の如く聖賢の環  
 璣を記さざるべし。  
 之を要するに新約全書の中には、ナザレのイエスの教訓を載せ、之を解  
 釋し、又彼の要求をも記せり。是等のものは、歴史上の證據あるによりて  
 吾儕が眞實なるものと認めざるを得ざるものたり。且人間の一切の心  
 靈的の需要を充たしむるもの也。又此聖書の中には、他の文書上の證據  
 あり、之に加ふるに争ふ可らざる多の事實と吾儕の實際の經驗とを以  
 てするときは、キリストが實際死より甦り給ひしことは、充分證明せら  
 るべし。キリストの述べ給ひし救拯を得るの道として、神が福音の中に  
 命を給ふ所の信仰なるものは、全く此甦りの證據を確固たる基礎となせ  
 るもの也。  
 若しも是等の古き文書が記されず、或は保存せられざりしならば、吾儕  
 は、キリストの實際の教訓に就て、大なる疑の中にあらざる可らず。又は、

彼が死より甦りしことを、今日吾儕に確むる所の明白なる歴史上の證  
 據は、存せざるなるべし。果して然らば、信仰は、道理的の基礎を欠き、基督  
 教の希望の道理を正當に求むる所の人々は、信仰によりて得らるゝ所  
 の祝福を得る能はざるべし。言を換て云は、救拯に關する至極肝要な  
 る要素は、失はれ、キリストは世界の救主とならざるべく、神が其子を與  
 へ、之を死しめて爲んとせし、恩恵の目的は遂に達せられざるべし。  
 故に吾儕は左の如く信ぜざる可らず、基督教文書の記されしこと、其  
 保存せられしこと、は、救拯に關する神の目的の一部分にして、神は其  
 子を世に遣はし、死罪に定められたる人類に生命を與へんとの善き音  
 信を宣傳へしめ、人間の罪に代りて死せしめ、その神より托ねられし天  
 職を證明せんために、死より甦らしめんと永遠の昔より決心し給ひし  
 神なれば、彼は又キリストの言辭と死と甦りの正確にして、充分なる記  
 録をも、人間の爲めに備へんことを、決心し給ひし也。故に新約全書は

神の目的の成就せしものなれば、神の人間に賜へる賜物と稱すべく、而して又キリストの言辭を正確に記載し、之を解釋せしものなれば、神の聲と稱し、神の言辭と稱することを得べし。

此記録が通常人間の言辭と、通常の方法を以て代々傳はることは、神の好しとし給ひしことならん。路加傳一章一節乃至四節より、吾儕の己に學びし如く、新約全書の記者中、少くとも一人は通常の人心に動かされて筆を取りしもの也。又他の記者は、約翰傳廿三章三十一節に於て、その記録の記されしは、吾儕が神の目的と認ざる可らざる目的の成就したるものなりと云へり。

今や、新約全書全躰にありて、神の靈は、凡て神が人間の衷に行し、人間に由りて爲し給ふ事の行動者たること明かなり。例へば、哥林多前書十二章四節乃至十一節等の如し。故に新約全書が舊約全書に就て教ふるが如く、我儕も確信を以て左の如く、論定するを得べし、曰く、基督教文書は

神の指揮命令によりて記されたるものにして、かの一千有餘年前に此世に生存し、死して甦りし所のキリストと、今日地上に生存する所の彼の僕等とを連結せしむる所の此書物は、全く神の力によるものなりと、之と同様に、舊約全書も、神が凡ての人類に異なりて、獨りアブラハムと其子孫とに、自らと自らの意志とを顯はし、以て此一國民をして、己れと特別の關係を有たしめしこと、完全なる歴史上の證據を有せり。神の此くなし給ひし所以は、イスラエル人をして、キリストの爲し給ひし無窮の祝福を萬人に傳ふるの通路たらしめんとて也。これ猶太人の聖書の言辭の中に含まるゝのみならず、基督教の文書の中に最も明瞭に記さる。凡て舊約の時代に於ける、猶太國民の心靈的修養の爲に、又最初は猶太人の口によりて宣傳へられざる可らざる所の福音に對し、豫備をなさんが爲に。此古昔の約束を載せたる記録は、至極肝要なるものなり。之に由て考ふれば、舊約全書も、救拯を爲さんが爲に設けられたる、一の

要素にして、神の指揮によりて記されしこと明かなり。神の行動者にして此の如き指揮をなすものは、聖靈より他にある可らず。これ即ち希伯來書三章七節、十章十五節、使徒行傳二十八章廿五節に明かに示さるゝこと也。言を換て云は、吾儕は確かに左の如く論定することを得べし、曰く預言者等を感動せしめて語らしめし所の神は、彼等及び其他の者を感動せしめて、其語る所の言辭を書さしめ、詩歌を詠せしめ、撒母耳後書二十三章二節を見よ。其中には彼等自己の心靈上の經驗を加へしめ、續々生ずる所の事實を記さしめ、且過にし日の歴史を作らしめたる也。

かく聖書中に記さるゝ事物を推量して、立てし所の吾儕の議論は、之を吾儕自らの心靈上の必要に照らし、福音の世界を感化せし事に照らし、て考ふるときは、舊約全書の權威に關して、新約全書の中に、明白に記され、或は其言辭中に含まるゝ所のものと、全く一致すること明かなり吾

儕の試験によりて證明せし如く、聖書は神か預言者により、キリストの口によりて、人間に語り給ひし言辭を、正當に記載し、是等の言辭を正當に解釋し、且是等の言辭の語られし場合の事實をも正當に記載せるものなるが故に、使徒等及びキリスト自らが舊約書を以て、神聖なる事物に關して終局の權威あるものと認めしは、其當を得たるもの也。而して又聖書は、神の靈の教導と指揮とによりて記されしものなるが故に、希伯來書の記者が、舊約書は聖靈の聲たりと云ひしも、決して過言にあらずる也。

かく舊約書の權威に關する新約書の判断は、上に引用せしが如く、其書中外見上か或は眞實に、多少不精確なる箇所あることによりて、傷けらるゝことなし。何となれば此の如き細事は、舊新兩約書の特別なる心靈的の目的以外にあるものなるが故に、聖經記者の思想の中にあらずるものなれば也。

余の事業は終れり。吾儕の周圍にある物質的世界と、秘かなる吾儕の心中と、基督教の無類に卓越せること、基督教の文書と、凡て是等のものを集合し、以て天に在ます父を發見し、吾儕に善き音信を告ぐる所の、尊き兄弟(キリスト)の聲を聞けり。其聲は神聖にして、其福音は、罪人すら天上の、吾儕の父の家に於て、不朽生命を得ることを示せり。吾儕は聖書に於て、古の默示と、キリストの生涯と、彼の教會の建設せられしこと、に關して、信ずるに足るべき記事を見、又はキリストの宣傳へし福音を精密に、且充分に記載し、而して之を解釋せしものを見たり。かく記載せらるゝ所の、是等の音信は、吾儕之を疑ふこと能はず。而して吾儕は自らの心中に既に神聖なる生命の働けるを感ず。此現在の心靈的生命は、吾儕の信ぜし福音の眞實なることを確め、且來らんとする生命を確かに預期するものにして、永遠の日の輝ける晨の如きものなり。

問題

- (一) 此書の議論は、聖書に特別の權威あることに關せざることを示せ。
- (二) 新約全書は、救拯に關する一要素にして、神の與へしものなることを證せよ。
- (三) 之を證すべき一の聖句を新約全書中より掲げよ。
- (四) 新約全書はキリストの教訓を精密に記載し、且解釋せるものたることを證せよ。
- (五) 舊約全書の權威に關する、聖パウロの意見をのべ之を證明せよ。
- (六) 聖書の權威は、近世の科學の發見によりて、影響を蒙るや。
- (七) 聖書は如何なる意味に於て、神の言辭たり、賜物たるや。





基督教信仰の根據終

明治二十八年五月十五日印刷  
明治二十八年五月十八日發行

千葉縣平民

翻譯  
發行人兼

和泉彌六

東京芝區二本榎町  
一丁目八番地寄留

印刷人

高田乙三

東京市京橋區西紺  
屋町廿六七番地

印刷所

株式會社 秀英舍

東京市京橋區西紺  
屋町廿六七番地

THE  
Firm Foundation  
OF THE  
Christian Faith.

A HAND BOOK OF CHRISTIAN EVIDENCES.

BY

JOSEPH AGAR BEET, D.D.

*These things are written that ye may believe that Jesus is the  
Christ, the Son of God: and that believing ye may have life in His  
name.*—ST. JOHN.

TRANSLATED

BY

Y. IZUMI AND REV. T. M. MACNAIR.

## TRANSLATOR'S PREFACE.

---

THE aim of this little book, as stated by the author in the preface to the English Edition, is to "give in outline, yet with scientific accuracy, a clean and comprehensive view of the evidence on which rest the truths" of the Christian Religion, and thus provide a "reliable safeguard against prevalent unbelief."

The book is translated and published in Japanese in the belief that it is well calculated to accomplish this aim, and also to serve as an appeal to the intelligent interest of those—the number of whom in Japan is increasing—who though no longer actively opposed to Christianity are as yet unconvinced of the truth of its paramount claims.

The ground covered and the method pursued are in a measure the same as in "Through Christ to God" (Fukuin no Dai Genri), a much larger work by the same author. Should the perusal of this smaller volume lead to a careful study of the larger and of similar treatises and thereby of the Christian Scriptures on which they rest, the hope of author and translators will be the more surely realized under the blessing of God.

TOKYO, May 1895.

THEODORE M. MACNAIR.

IZUMI YAROKU.

## CONTENTS.

---

### CHAPTER.

- I. RELIGION AND THEOLOGY.
- II. THE VISIBLE AND THE INVISIBLE.
- III. THE MORAL SENSE OF MAN.
- IV. RETRIBUTION BEYOND THE GRAVE.
- V. CHRISTIANITY AND CHRIST.
- VI. THE CHRISTIAN DOCUMENTS.
- VII. THE MORAL TEACHING OF CHRIST.
- VIII. THE GOSPEL OF CHRIST.
- IX. THE SON OF GOD.
- X. THE RESURRECTION OF CHRIST.
- XI. OBJECTIONS.
- XII. SUMMARY OF RESULTS.
- XIII. THE AUTHORITY OF HOLY SCRIPTURE.

